



71
489



始



71-489



原案集
冲三子海

大正
12. 3. 6
内交

浪六全集

第貳拾編

罵倒

録

蟻の低聲

浪六著

大衆文藝三ノ巻

盛夏炎天の眞ツ最中、疊の上の人間よりは眼にも見えざれど、斥候に出でたる二三疋の蟻、庭前の大地に砂糖の山を見付け出して、おのれが本陣へ注進するや否、それとばかりに穴を虚にして、ぞろぞろと先を争ふ數萬疋、中にも大將分の一疋は聲を濁しながら、「さア近來の獲物だ、かういふ天氣でも何時、さツと來るか知れないから今のうち、骨を

罵倒録—蟻の低聲

惜しまず一生懸命に運んだ運んだ、おい、誰だい、さう勝手に横へ出ちやア、いけ
ないよ、順々に續いて徒勞のないやう、また辻々の曲り角に氣を付けるよ、行く方は左
を歩いて戻る方は右だ、こんな急がしい時は平常と違つて、いち／＼途中の挨拶に及ば
ないぞ、さつさと働いたり働いたり」

「承知しました、しかし大將、今日は凡そ幾度ぐらゐの往き返りで休憩になります」

「さうだなア、よく／＼閑暇な時に運ぶ蜂や蚯蚓の死骸と違つて正味の獲物だから、五度
のところを往復三度づゝで交代の休憩にしてやらう、その代り途中で舐めたりすると、
きかないぞ」

「そんな卑劣な事を仕ますもんか、そりやア大將、人間の方にあるこつてすよ」

「いや、あまり獲物が善過ぎるから、つい甘味に氣を取られて、うか／＼すると人間に類

するやうな浅ましい心が起らないとも限らない、どんな事があつても、どんな場合でも
いやしい人間の眞似を仕ちやア無効だぞ、どし／＼遠慮なしに螻蛄の正直仲間を叩き出
すぞ、もし現世で怠けて働かずに狡い事をすれば、きつと罰が當つて來世は嫌な人間に
生れ變るぞ、は／＼ア汝達、モウ三度往復したかい」

「誰彼なしの一系列に働くんですから、決して不足をいふ理由ぢやア御坐いませんが大
將、實に今日は暑い日ですよ、びつしより汗水になつて仕舞ひました」

「御苦勞、御苦勞、いくら暑くつても汗水になつても、働ける時に働くから冬の穴籠りに
樂が出来るんだ、乃公なかど鼻唄三昧で面白く穴の底に遊んでる頃は、人間どもの越
すに越せない年の暮だぜ、びいびい吹きぬく北風に水ツ鼻を垂らして四方八方へ断け廻
る哀れな狼狽へやうを考へる、現に今この主人が、さうだよ、あの通り涼しさうな座

效しきの中央ちゅうなで、さも心地こころよげの大おほの字形じりに晝寝ひるねしてるが、なアに晝寝ひるねして生涯しやうが安樂あんらくに食くへるほどの用意よういも身代みだもある人間じんけんぢやアない、實じつは夜よの眼めも寝ねずに働はたらいて、ヤツと無事むじに死し際の葬さうし式しきを出だせるくらゐの人間じんけんだ、うかうかすると長ながく此家こゝにも居ゐれず、どツかで野の倒死たれじの場ば處ちを見付みけに出でる奴やつだぜ」

「いや全く、さうかも知れませんね、暑あつけりや傘かさも帽子ぼうしもある自由じゆうな人間じんけんで居ゐながら、この結構けつこうな天てん氣きに晝日ひるひ中なか、用ようのある身み體たいを横よこにして、ぐうぐうと、あの高たか軀いびきですもの」

「あの高たか軀いびきも一睡いすの夢ゆめだ、またぐ間に秋風あきかぜが身みに沁しみて來くるよ、秋風あきかぜの吹ふくに付つけてもあなめくと詠よんだのは昔むかしの人ひとで、こゝの主あるじ人ひとなア秋風あきかぜの吹ふくに付つけても、裕あはせ々の大おほ駭さいぎだ、どうか斯かうか、身みに裕あはせの出來きる頃ころは、桐きりの枯かれ葉はが一枚まい二枚まいと軒端のきはを叩たたいて、すぐまた冬ふゆの支度しだくに追おひ立たてられ年の暮くれに攻せめられ、一年中いねんちゆうの大油斷おほゆだん、今いまこの時ときに押寄おしよせ

たりと騒さわいでも驚おどろいても、無効だめだ、おツつかない、しかし大概たいていの人間じんけんは皆みなこの通りで、おツつかない無効だめを生しやう涯がいくると水車みづぐるまのやうに繰かり返かへして終おそるんだが、絶たえず口くちで伶俐りやうな事ことばかり饒舌しやべる割合わりあひに何故なぜ、この分わかり易やすい事ことが分わからずに知しれきツた馬鹿ばかな苦勞くろうするんだらう、先見せんけんの明あきがあるの何なんのといふが一すん寸前すんさきの脚あし下さきへも氣きの付つかないのが人間じんけんだ」

「脚下あしもとどころですか、起おきて居ゐて眼めを刺さきながら、頭かぶの上うへの蠅はも逐おへませんよ」

「そのくせ蚤のみや蚊かに食くはれた痕あとまで、他人たにんの事ことを喧やかしく詮議せんぎ立たてるんだ、幸さいひ我われ々は自力じりきで脇目わきめも觸ふらず働はたらいて食くふから、蚤のみや蚊かのやうに穢けがらはしい人間じんけんの生血いけちなカ吸すはないが、もし生意氣なまいきに人間じんけんの方ほうから觸さわりやアがツたら遠慮えんりょなく、ちくりと螫さしてやれ」

「無論じろん、をりく遣やッてやりますよ」

「人間のやうな、怠ける事ばかり考へてる奴等に、我々の神聖な勞働を害されて堪るもんか、彼奴等のいふ精力主義は實際、我々の方にあるんだ、我々が多年の力を盡して美術的と實用的の兩方面に拵へあげた立派な塔を示してやつても、たゞ珍らしいと見物するばかりで、自由自在に五尺の身體を持つた奴が恥かしいとも面目ないとも思はない、また我々仲間の白蟻が人間どもの高慢な鼻ツ柱を挫ぐため、彼奴等が萬代不易の堅牢と誇る石垣でも建築でも、をり／＼毀してやる事があれば、たゞもう呆れて驚くばかりさ、いかに考へても自己等の力に際限のある薄弱さを少しも悟らない、つまり教へても警めても效のないものは人間だな、あれで無常を感じたとか大悟徹底したとか、始めあるもの必ず終りあるを知つたとか、いふのが呵しい」

「おや／＼大將、この主人が眼を覺しましたぜ、眼を覺して起きもせず、どうです、どうです、寝ながら手足を伸ばして、あの大きな欠伸」

「なアに眼を覺したのは今日の晝寝の眼だけ覺めたのさ、翌日また今ごろ死んだやうになるよ、あゝいふ奴が、どうして生涯の眼を覺すもんか」

「しかし大將、怠けものゝ動く時は、贅澤な眞似をしますからね、もし起きて来て一時の暑さ凌ぎに庭前へ水でも撒くと厄介ですよ、ちよいと困りますぜ」

「なアに大丈夫、いろんな用を差置いて晝寝するやうな奴は、なか／＼急に起きて早速手足の動くもんでない、そら欠伸したかと思へば、また向へ寝返り仕たらう、萬事あれだよ、たとひ水を撒くにしても、まづ人に言ひ付けて、自己は縁先で團扇隻手の晩酌をやるぐらゐの藝だ、天から不意に降つて来る夕立の用心は怠れないが、あゝいふ人間のする事に慌てる恐れはない、ゆる／＼見縊つて居ても慥だ」

「なるほど、流石に大將だ、彼奴また寝ましたな、あの様子ぢやア夕飯も食はずに、翌日の朝まで寝通すか知れませんぜ」

「なアに、きつと夕飯には起きるよ、朝飯も晝飯も夕飯も食はずに寝通すくらゐの奴は、さんざ働いて勞れきつた後か、さうでなくば、また時と場合で三度の飯を抜いて働く事もあるが、あゝいふ奴は怠ける事に付いて、だらしない割合に食ツたり飲ンたりする事は、ふしぎに規帳面で案内、きち／＼したもんだ、つまり必要に不規則で無用に喧しく規則立ツたのが人間の常習さ、我々の方から見ると、まるで無意味に働いたり、飛ンだり跳ねたり仕てる奴が多いね」

「他のこつてもないに、どういふもんで人間は自分の事に、さういふ工合な損の多い事をするんでせうか、ます／＼料簡が分りませんね」

「そこが人間の哀れさで、なるべく骨を折らずに遊んで居ながら、うまい事を仕ようとす
るから、とんでもない履き違ひをしたり間違ツたりする事が多いんだ、つまり正直に絞
り出しても、さのみ感心の出来ない奴が、その智慧を悪い方へ使ツて、おまけに智慧負
けをするんだもの、ろくな結局のない筈だ、それで進退これ谷ると、あゝ天なるかな命
なる哉とは、よくも言へるぜ、自己の馬鹿さ加減を柵の上へ、そツくりと擧げて置いて
何が天命の知ツた事か、兎も角、人間といふ奴、何事でも自分の力に及ばない時は、す
ぐ其場で逆捻を食はないやう、口も手も出さないとこぼかりを考へて不足を持ち込む
癖がある、時節が悪いとか運がないとか吐してね、天命も時節も運も自分の働き次第で
来るもんと知らないんだよ、もし働いて来ないとすれば、どツか働き工合に間違ツた點
がある知らないんだよ」

「さうですねエ」

「さア、もう獲物は運んで仕舞ツたやうだから、みんな勢揃ひして引揚げろ、引揚げろ」

蝶の私語

うらゝかに静なる日、ひら／＼と音なき風に誘はれて、いづこよりか飛び來りし雄蝶と雌蝶、よれつ、もつれつ、暫し翩翩と戯れしが、樹の間の葉蔭に憩うて翅を抱き合はせながら、さも嬉しげに私語きぬ、

「はる／＼と野を越え川を渡り里を過ぎ、いろ／＼の苦勞をしました甲斐があつて、まア嬉しい事」

「いや、私も随分と難儀をして來たよ、そも／＼人に嫌はれる毛蟲から蛹となつて時節を

待ち、蝶となつて出るや否、ふしぎの縁に汝の香を慕うてね、かう廻り逢ふまでの間、なかく一通りや二通りの事ではなかつたよ」

「やはり人間の方でも、こんなでせうか」

「なアに人間といふもの智慧はあるが眞實の薄いもので、我々のやうに情の濃かな哀れも優しさも何もないよ、婚禮にこそ立派に我々の心を形取ツて目出たう三々九度の祝言を壽ぐが、あれは只その場かぎりの氣休めで、添へば月日の經つに従うて互の不足ばかり口や手に出すと出さないだけの事、夫婦喧嘩の絶え間がない、その證據には萬物の靈長とか何とか自慢して居ながら、一夫一婦といふやうな分りきつた事を恥かしくもなく、いまだに議論したり講釋したり騒いでばかり居るぢやアないか」

「ほんですねエ、義太夫の朝顔日記なども、人間の方でこそ、露の乾ぬ間の一村雨、あ

れほど哀れがツて袖を絞る涙の種にして居ますが、思ひぞ積る數々の辛苦を重ねて互に戀人と廻り逢はず其まゝ野山に朽ち果てるものゝ多い我々の方では、珍らしくも何ともありませんもの、つまり人間には朝顔のやうな眞實のある戀も尠いからですわね」

「尠いどころか、近來は殆ど無くなつて仕舞つたらしい、加之も無くなつた理由を、どういふかと思へば、社會の組織が複雑になつたとか、生存競争が激烈になつたとか、まるで自分達が知らない無理な迷惑でも餘所から持ち込まれたやうな事を盾に取つて、勝手な文句ばかり列べて居るが、なアに複雑でも競争でもなく昔から人間といふものは薄情だよ、たまたま薄情らしくない戀とか愛とかいふものがあれば、多くは皆これ道に外れた罪惡を伴つてる、そのくせ口先では自然の本能とか神聖とか高尚優美な事をいふから猶更ら呵しい、つまり人間といふものは言語が自由だからね、いろんな修辭法が上手に

發達してるといふだけの藝だよ、どこに我々のやうな野を越え山を越えて尋ね合ふだけの眞實があるもんか」

「全く辻褃が合ひませんね、朝顔日記に泣くかと思へば、嘘にもせよ良人を慕うて石になつたといふ松浦姫の事を、貞女でも石になるとは惡堅い、と川柳に笑つて居ますよ、松浦ひめ涙は皆な砂利になり、いかに酷いではありませんか」

「だからさ、人間の夫婦といふものは、たゞ雙方より出合頭の男女一對といふだけの事でその一對が何時、破れても潰れても、合はせものは離れものと言つて、少しも構はないやうになつて居る、喧嘩しながら生涯を連添ふのは、よほど上等の部で、多くは喧嘩もせず時と場合の都合上、お互の相談づくで、さつさと別れるやうになつてる、中には相談どころか、黙つて其まゝ遁げたり走つたりするのは珍らしくない、これも川柳だが

「まだしも奇特な乳呑兒を連れて遁げ、どうだい、二人の中で出来た子を連れて遁げるのは奇特で神妙だとさ、して見ると恥も外聞も捨て、遁げるぐらゐは當然のやうに思つてゐるんだな」

「あら、まア、そこまで情のないもんですかねエ、それほど情がなくつて何故、あゝ騒ぐんでせう」

「情がないから騒ぐのさ、つまり薄情同士で、安心して居れないんだよ、あけても暮れても雙方お互に疑ひ合つてね、もしや乃公を捨ては仕ないか、もしや妾の外に何かありは仕ないかと、いはゞ愛と愛の寄合でなく、敵と敵との睨み合さ、だから末の末までといふ友白髪の口約束が間違ひ易くつて、をり／＼恐ろしい双物三昧なにか起るぢやないか人間の方で一番に騒動の多いのは、一番に交情の好い男女の間ださうだ」

「きけば聞くほど、なさけないもんですねエ、それで獻身的の愛だの戀だのと、猶更ら呵しい事、いくら口が自由でも、よくまア、そんな事が」

「そこが人間さ、黙つて居て實際に行ふ獻身的の愛は我々の方だよ、考へて御覽、さんざ互に憂苦勞をして来て、今こゝで巡り逢うた重ねの嬉しさ、過ぎ越し方の難儀も何も一切、忘れて仕舞つて、かうした静な葉蔭に楽しい夢を結ぶのが身の終焉、もはや浮世に思ひ置く事なく、二世を契つて死出の首途をすぢやアないか、これほど清い本望も満足もないに、人間は我々の事を笑つて、生殖作用が済めば忽ち消滅し受胎器また種を遺せば直に消滅するのを、馬鹿馬鹿しく思つてるやうだが、不規則と不自然を極めて放逸散漫なる人間の男女間に全體、生殖器の作用以外、どれほどの立派な崇高な價値があるんだらう、寧ろ生殖作用のために争つたり罪を犯したり殺し合つたりするのが、いか

にも可哀さうぢやないか、また種を遺して其まゝ直に消滅するのが、どれほど馬鹿馬鹿しいんだらう、どれほど不思議なんだらう、人間には種も遺し得ない女を承知の上で、それがために家庫を潰し身命を亡すといふ底ぬけの馬鹿が多いぢやないか」

「眞實ですワねエ、どういふもんか、人間といふものは、無事な女よりも却つて罪惡の原因となるやうな女ばかりを選び好んで、そのくせ、日夜それがために騒ぎ廻つてるんですね」

「しかし人間の中でも多少、わかつた奴は我々を羨むの極、蝶が我身か我身が蝶かと夢に吟うた莊周の如きは、なか／＼達観したものだ、いたづらに蝶花形を一時の婚禮に用ゐて、すぐに喧嘩離別をするやうな淺ましい、情も何もない奴等に、この我々の正しい深い戀と愛とを批評なんかする理由も資格もあるもんか、づう／＼しよ」

「づう／＼しいのが人間の性質ですよ」

「あてにもならない月下氷神へ無理な願ひをしたり祈つたりするよりは、まのあたりに教へてやる我々を正直に學べば、かたい契りの破れる道理もなく、うれしい後で互に泣いて恨み合ふ涙もなく、わさ／＼生れて來た浮世が嫌になつたりする筈もないに、どうして人間は、あゝだらうねエ」

女 難

女難といふ語は、女のために思はぬ不意の災難を蒙むる意味にして、他人の妻に横戀慕され若しくは嫌な女のために執念深く追ひ廻され附け纏はれて遁げ場を失ひし時に起るべきものなり、

されど世間普通、乃公は女難のため常に苦しめらるゝといふ奴、よくよくその面を見れば天下泰平、どう考へても女難に逢ひさうな男でなし、實は女難に巡り逢ひたく日夜その女難を探し歩いても、寧ろ女難の方で遁げ廻るべき筈の奴が、頻りに恐れて女難女難と叫ぶ何ぞ自惚の甚だしきや、盜賊が素寒貧に對すると一般、女難また笑うて曰く、御安心あそばせ、お門が違ひます、放蕩のため身を過りて窮するものは女難にあらず、古今ともに間違ひのない先例通り豫定の結果にして、自縄自縛の難なり、いはゆる戀愛のため一身の破滅を來すもの、また女難にあらずして自ら求めし女難なり、汝の招きし難を相手の女に塗りつけて今更ら返らぬ泣言をいふ奴、戀に甘ツたれて面の雜作を崩しながら笑うた時の事を思へば、差引勘定、どこに不足を持ツて行かるべきや、眞理は最も算數に明白なり、

もし女難の語ありとすれば、また男難の語なかるべからず、男より女のため斯うなつたといへば、女よりも男のため斯うなつたといふべき筈にして、雙方お互に事なく樂しき間は相擁して戀の神聖を謳ひ愛の神に感謝しながら、一朝こゝに相離るれば忽ち路傍の人となりて、彼女のため酷い目に逢つたと恨み、あの男のため飛んだ目に逢うたと泣き、甚だしきは可愛さ餘ツて憎さの百倍お互の恥を負けず劣らず曝し歩くに至つては、たとひ嘘にもせよ一時お世話になりし戀愛の神に對して何とも申譯のない奴等なり、無理情死を以て女難の極とするものあれど、無理に情死を迫らるゝ奴は、迫られぬ智慧も工夫も分別もない奴にして、實は無理情死を迫られずとも、どうせ無事に生きて居れぬ奴なり、

そもく男として女に關すれば、關せざるよりは快樂のある代りに、また關せしだけの面

倒もあるべき筈にして、その面倒の聊か深くなるや否、忽ち女難と稱して狼狽へ騒ぐやうな奴は、始めより女に關すべき資格のない奴なり、たとひ多少の女難に逢へばとて、損益は商人の常と等しく、功罪ともに荷ふべき自己の出来した事を、楽しい時に人しれず黙つて居ながら、面白くない時に他人の迷惑でも背負ひ込んだ如くに、わい／＼と騒ぐ奴があるものか、實際に於ける女難も男難も、春草の萌ゆるが如き青年男女の戀にあらずして、靜に生涯を伴ふべき夫婦の間に多し、たとひ互の選擇に遺憾なしとするも、その遺憾なきは未だ夫婦たらざる以前の選擇にして、これに所謂仲人口を添へ親々の善は急げに急ぎ立てられ、本人また内心の飛び立つ嬉しさに深き詮議の届くべき筈なく、つまり他人の若い男と他人の若い女と始めての合頭に相擁して夫婦となるがため、殆ど雙方より運命の闇を引き合ふ

が如く、人生の快樂と家庭の圓滿ここにあるべき筈が案外の豫期に反して、良人は妻のため、妻は良人のため、却つて其快樂を奪はれ其圓滿を失ひ、寧ろ家庭の不幸を來し悲惨に陥るもの世間その例に尠からず、加之も戀に狂ふ青年男女の朝に相逢うて夕に相離るゝが如き簡便お手輕の野合にあらずして、世間に對し親戚知己に對し第一は自己の道徳心に掣せられて、無情冷酷の良人に囚はれ女一代の生涯を泣いて送るもの天下それ幾何ぞ、これを男難と稱し、説いても論しても度すべからざる妻を持つて餘して可憐ら男子の内外に不愉快を與へ活動を鈍らしむるもの天下また幾何ぞ、これを女難といふ、大なる統計的の眼孔を以て高きところより見れば、さのみ心配するに及ばず、男女の兩難お互様の事なれど、願はくば誰しも御免を蒙りたく、現在その難に當るものは實に人生の不幸なり、

されど或横著物は平氣に空を嘯いて曰く、長年の間、さんざ骨を折つて育てた他人の息子や娘を無價で遣つたり取つたりするに、そのくらゐの難は當然なり、もし難に逢へば、馬鹿正直に難を守らず難と戦はず、雙方ともに心易く入り替り、新らしく立替りて、ブンブン遠慮なく御都合の宜しきやうに難を避くべしと、かういふ奴には、流石の難も、何と詮方なき次第といふべし、

また或老功の経験者は曰く、夫婦の間に女難も男難もあるべき筈なし、男難に泣く妻は愛を以て良人を慰め誠を以て良人を導き得ざるもの、女難に苦しむ良人は誠を以て妻を導き愛を以て妻を同化し得ざるもの、そも／＼夫婦喧嘩は女難と男難の鉢合せなりと、さるを古來たゞ女難の通語のみありて、殆ど男難の熟語なかりしは、何のためぞ、文字上の事は多く男子の手になりしがためか、事實上また男難よりも女難の多きがためか、但し

男尊女卑の舊思想より不完全に産れ出でしがためか、いづれにせよ、今日なほ女難の語ありとすれば、公平の上に於て男難の語もまた無かるべからず、まして妻でもない女の尻を追ひ廻して、先の料簡も知らず自己ばかりが上氣せきつた果に女難を叫ぶ奴、これが即ち諺にいふ、お話しにもならぬ奴なり、

色 男

いつの世、いづこにも、いたるところ絶えざるものは、盗賊と色男なり、盗賊と並び稱しては、天下の色男に對して甚だ相濟まざる次第なれど、まづ我國に於ける色男の先達を、在原業平朝臣とすれば、人しれぬ築地の垣の破れより忍び込んで情の露に濡れ、或は近づき難き上臈を偷み出して秋の夜路を背負ひながら遁げ隠れせし等の如き、

強ち縁のないでもなし、今日なほ世間の通俗に色男を稱して、豆どろぼうといふにあらずや、

「盗人に見咎められて恥かしや、夜な夜な運ぶ戀の重荷を」この狂歌は既に色男と盜賊の縁あるを立證せり、加之も戀は人目を忍ぶに情ありとして、由來この色男は世間の知らざる女を偷むに手腕ありと稱せられ、また女の方よりいへば色男これ隠し男なり、されど世間の色男は多く自畫自贊の色男にして、他より公平なる批評眼の色男にあらず、まして相手の女よりは猶更ら實際の色男に見らるゝもの尠く、十中の八九は總て獨り極めに本人だけの色男なり、

他人でない現在こゝに本人の乃公が然う思ツてるから間違ひのない筈といふ論法は、外の意味に通ずる場合あれど、この色男ばかりは御本人だけの承知で通らず、必ず相手の女と對照して、その女より眞實に色男の待遇を受けざるべからず、此方に間違ひなくとも彼方に大間違ひの色男、頗る多し、

元來この色男なるものを分析すれば、うぬぼれを以て全體を組織され、恥を恥とも思はぬ鐵面皮が三分、何は措置いても身を飾りたい虚榮心が二分、坐なりの嘘と偽りが二分、お先まツ闇の盲目滅法が三分、以上の原素に、多少の辯口を加へて成立つがため、一點の秋波も忽ち我に思召ありと心得、美人の嬋妍窈窕たるは悉く我に媚を呈するものと極め込みちよいと一言お世辭を蒙れば、づう／＼しく直に研り込んで容易に退かず、一度や二度の肱鐵砲は女のテレ隠しと稱して、寧ろ我に對する挨拶か愛嬌かの如くに面の皮の厚い奴、よほど手厳しく叩き付けて、ぎやふんといふ目に逢はせざれば逆も正氣に返る筈なし、たとひ正氣に返りても、その正氣は永久の正氣にあらず、たゞ一時その女に對する一剎那

のみ、なほ減らず口を叩いて曰く、わからない奴には手の著けやうがないと、實は本人の分らなさを加減に手の著けやうのない奴なり、
 金あるは野暮にして意氣なるは貧なり、かはいゝ男は何故まゝならぬと歎ぜられ、色をとこ金と力はなかりけりといはれしは、昔の色男にして、いくぢなしの一面また多少の哀れに打沈める優しき點もあれど、今日の色男と自稱する奴、たゞ圖太く押が強くて恥も外聞も構はずに根氣よく附け纏ふのみ、近來の流行語に所謂る色魔なるものと始と相近し、恥を恥と思はねば恥を掻いた例なく、段々に剝かれて厚くなる面の皮といふ川柳は、今日の色男を捉へ來りて遺憾なく解釋せり、

戀病

戀病、戀のために病を起すもの、世間を恐れて律義に正直なる昔の人間は、くよくくと人にも得いはずして我胸に鬱ぎ込みし結果、往々この病氣に罹るものありしが、何事も無遠慮に横著なる今日の人間は、たゞ一人の戀に病み煩うて、骨と皮となるほどの内氣者は尠し、

昔の戀病にも、相手を定めず自己まづ煩うて置いて、誰かに煩ひ當てゝやらうといふ暢氣な奴もあれど、今日また失戀のために自殺する青年男女あり、
 されど戀を失ふと共に身を失うて、失戀のために自殺するものは今日の稀なるに反し、昔の稀なりし煩ひ當ての戀病は今日に最も多く、いはゆる戀愛の讚美者は皆これ煩ひ當てた連中なり、

結局、昔は枕の下の涙川、寢ても覺めても夢うつゝに忘れかねし戀人を慕うて病み煩ひし

が、今日は戀人を探し戀人に出會はず前より、既に戀愛の煩悶者となり患者となりて、戀の相手は只これ男なり女なりといふのみ、加之も此病人は物思ひに瘦せ衰へて恥かしげに寢床に顔を隠さず、白日青天の下、びちびちと跳ね廻り、電燈瓦斯の照り輝く下、のそくと出歩き、公園の葉蔭に据ゑられたるベソチの上、活動寫眞の薄闇き合間、縁日の雑踏に乘じ郊外の散歩に付け込み、その自由なるものは都門を離れし温泉、鑛泉、奥深き料理屋、簡便の小待合、いたるところに病氣の療治を仕合ひ、介抱を仕合うて、雙方ともに忽ち本服するかと思へば、また各々その相手を變へて病人となる工合、つまり癒つたり煩うたり年が年中この病を繰り返せり、これは文政年間の事實談なり、歴々の高家旗本に兄が世を取りて部屋住の舍弟に名高き遊冶郎ありしが、雨の夜も風の夜も土手八丁のそり節、吉原の大門を潜らずば寢られぬと

いふ放埒三昧、流石の兄も呆れて弟に向ひ、それほどまでに思ひ詰めし遊女ならば身請して得させむ、いかに大金なりとも一時の金と汝の生涯に代へ難しといへば、この弟その頃の通人を以て任せしもの、冷かに笑ひながら、たゞ一人の女に眼が暮れて通ふ野暮でなし現世からなる極樂浄土あの廓が面白うて通ふのみと、きくや否、ぬき打に兄の一刀、弟の頸を刎ね落せり、つまり一人の女に戀するものは、その女を我有として身持は直れど、あの廓といふ五町まち三界の吉原が面白うて通ふ奴、吉原の亡びざるかぎり迎も放埒の止むべき善なしといふにあり、今日の戀を謳ひ愛を歌うて狂ひ廻る煩悶患者は、殆ど皆この弟に類せるもの、かぎりなき總ての男と女とを相手に戀愛の病的となり、艶書は商人の引札に等しく、秋波は誰彼なしの總花に等しく、男女いづれも其中の手に入るものを戀と稱し愛と稱し、加之も戀愛の

目的は唯一無二の人にあらずして、何時たりとも勝手次第に都合よく取換へ得らるゝ獸慾の快味なり、

一方また今日これを文字上に教唆し挑發し詩的趣味に讚美し慾憑する馬鹿者ありて、さらぬも既に半狂氣の半病人となりし患者ども、得たりと手柄顔に振舞うて、いかでか躊躇すべき、心臓病に相撲を取らせ肺結核に腐敗物を與ふるが如し、

犠 牲

國家の犠牲、社會の犠牲、人道の犠牲、いづれも高尚なる思想の結晶體にして、尊重すべき歴史は大なる犠牲の解釋といふべく、生命の百年に満たざる人間にして千載不滅に傳へらるゝもの、また高潔なる犠牲の賜ものなり、

されど犠牲の文字も用語も、今日は頗る下落して甚だしく手輕の安直に取扱はれ、いたるところ殆ど犠牲の意味を没却せり、

あけても暮れても蒼蠅いほど就職難を叫び歩いた奴が、やうく幾何かの給料に有付けば忽ち面を膨らして、當然に盡すべき筈の勤務も努力も一切この犠牲と稱し、自己が喰ひし月々の味噌醬油も米屋薪屋の支拂ひも、夜遁した隣家の勘定を引き受けたが如く生活の犠牲に供せらるゝと稱し、自己の産んだ子を育てるにも他人の捨子を養育するが如く子女の犠牲に供せらるゝと稱し、その最も簡單に露骨な奴は、著物を脱ぎ時計を外して牛飲馬食の犠牲に供するものあり、手の届くだけ知己朋友を借り倒して夢の如き一時の快樂と虚榮の犠牲に供するものあり、就中、この犠牲は女に供するもの多し、たとひ恩人先輩の急に赴かずとも、たとひ父母長上の召しに應ぜずとも、女のためには

忽ち一令一呼の下に蹶起して、わざ／＼犠牲となりに行く奴さらに多く増加し來れり、萬障御繰り合はせの上、御光來を相待ち申し候といふ手紙の文句には、なか／＼急に腰をあげて早速參上するもの歎けれど、女のためには來てくれともいはれざるに、自己みづから進んで實際の萬難を排し萬障を繰り合はし、雨にも風にも遠路を厭はず、のこ／＼犠牲に出かける奴の多きは、今日の所謂犠牲なり、犠牲の價値も下れる哉、當然の働きを犠牲と心得、また好んで入らざるところへ犠牲に出かける奴の多き一面には、自己より以下の人間を悉く自己の犠牲物として、この犠牲を借金取の如くに催促の嚴しい奴あり、

どれほどの世話もせざるに、あれほどの世話をしてやつたと呼び、その恩を忘れて乃公の意に従はないとか乃公のために盡さないとかいふ奴、いづれも犠牲の無理注文にして、も

し嚴格に詮議立すれば、案外の反對に却つて犠牲のお剩餘を出さねばならぬ奴あり、甚だしきは、一點さらに自己の關せざる他人同士の犠牲問題を彼れ是れと吐して、いはゆる犠牲の彌次馬なるものあり、

そも／＼犠牲は義務と名譽との最高力を發揮せるもの、つまり身を殺して仁を爲すほどの大事にあり、たとひ身を殺さざるも生涯の安樂を抛ち利益を捨て、惜しからざるほどの誇りにあり、どうなつても直に後で笑うて濟むが如き日常お安い藝當ならむや、

談話

談話は言語の交換にして、言語は意志の發表なれど、人間は獸の吼ゆるが如く、鳥の啼くが如く正直なるものにあらずして、わざと殊更ら反對の意志を發表するもの多し、

言行の不一致を責むるよりも、まづ先決問題として、言意の不一致に油断すべからず、甚だしい奴は心にもない事を口に出すのみならず、これに巧妙なる顔面態度の表情を現はし、わざ／＼お景物の身振まで添へて嘘八百を列べる奴あり、病の数を四百四病とし嘘を八百とせしは、昔の計算にして、今日は醫術の進歩と共に驚くべき病数の増加せると等しく、人間の横著になりしと共に嘘の數また幾千萬なるやも知るべからず、

嘘で固めた浮世とは、あまり人生に對する僻み根性なれど、理解力なく、判断力なく、ただ人の談話を悉く眞正直に受けて、いち／＼鵜呑みに感心するもの、氣の毒ながら動もすれば首尾よく一ぱい喰ふ事あり、先哲の名著さへ、悉く書を信ぜば書なきに如かずといふにあらずや、まして方便と策略と當座お世辭の多き今人の口より舌より相手次第に出

まかせの談話言論は最も油断大敵、英雄よく人を欺くといへど、英雄の欺くは他に大なる理由あり、英雄でもない猪鼻助が必要でもない場合に臨機應變と稱して、とんでもない嘘を吐く奴、なか／＼多し、

いはゆる今日流行の成功談なるもの、また半分は眞の骨を隠せし嘘の皮なれど、たゞ嘘を吐く奴に嘘を取消すだけの地位と境遇あるがため、聴くものゝ耳に御尤千萬となるのみ、この成功者もし半途に倒れたりすれば、いかなる名論卓説も河童の屁なり、

どれほどの確實なる成功談も、その人は其時と其事と其場合とに於ける成功の人のみ、これを他山の石とするは可なれど、直に取ツて以て本人すぐ夫れに出来上らむとするは、時刻々に間斷なき社會の進歩と時勢の變遷とを知らざるのみならず、他人の拵へた牡丹餅を、坐して喰はむとするもの、あまり蟲の善すぎた業なり、

實は過ぎ去りし自慢の手柄談話を、有難く感に堪へて拜聴するもの、人の恍惚に我を忘れて、げらく嬉しがると同じ事なり、

談話の上手なるは、多く立つて働く事に下手なり、談話の巧妙なるもの、案外その實際に拙劣なるものなり、うまく饒舌るが借どうも仕事が進ばぬといはるゝもの、世間に尠からず、口を叩かして置けば天晴れ一人前と稱せらるゝ奴、いたるところに群をなして、うよ

うよとせり、
談話また多くは本人の談話にあらず、その源を探るに半以上は受賣なり、受賣も満足に間違ひなく取次の出来る奴は稀にして、もし商品ならば忽ち閉店の恐れあり、中にも最も滑稽なるは、受賣の説の出處を忘れて本家本元の御當人に向ひ、さも高慢面に喋々と饒舌り立つる奴なり、その憎むべきは、入らざる無用の場合に交際の無い知名の士を引合に出

して、いち／＼自己の談話に手製の金箔を附けむとする奴なり、

うかく／＼談話に釣り込まれ、うツかり談話に乗せられて、二度と再び取返しのならぬ後悔するものは、釣り込で乗せる奴の不埒なると共に釣り込まれて乗る奴の馬鹿なり、身分不相應の衣服粧飾を眼に見て笑ふものあれど、人間不相應の談話に氣が付いて用心するもの尠し、

交際上手とは、或意味に於て、差支のない嘘の上手なり、もし外交辭令その通りの眞實なれば、國と國とに實戰の必要なく、人と人との談話は時の挨拶以外、多少の注意を拂はざるべからず、

相手によりては多少の注意ぐらゐで済まず、聊か酷なれど、頭から此奴め嘘を吐きに來をツたと思つても、敢て無禮にならぬ事實は今日の世の中に多く、肝膽相照の語は一片の空

文字にして、只これ雙方お互に都合の善き間のみ、もし地獄へ行けば悉く閻魔の廳に舌を抜かるゝ奴が、現世なればこそ空とぼけて舌長に饒舌れり、たゞ口より舌長に饒舌るのみならず、これに法螺の貝を添へて吹き立つる奴あり、さらに嘔吐きの味方を集めて、いはゆる衆言に耳を聳せしめむとする奴あり、まづ談話の面白く聞いて安心すべきものは、利害得失を離れし知己朋友の風流談と親子兄弟夫婦の間に於ける情實談とのみ、

世に偽りなきものを戀とすれど、戀の陸言は返ツて怨恨の種になること多く、加之も到るところ有合はせの出来合に行はるゝ今日の戀は眞實の戀にあらずして、始めより雙方に掛引のある戀なり、男女いづれも損益を先にして戀と慾との二道を規へる人情の輕薄さ、豈それ掛値なしに正札附の戀愛なるもの容易にあり得べけんや、

惚れたといふ事に、嘘偽りのあるものかいなうとは、淨璃理の文句なり、僅に少數の戀愛者中、たま〜かくの如きものあれど、實際の多きに於ける當世風の男は女を釣らむとし、女は男を釣らむとして、その間に交換せらるゝ談話の一語一句、さも優美に情の溢れたるが如きは、雙方ともに生涯の智慧を絞りし欺し合なり、もし其中の夫婦になるものあれば、嘘から出た實なり、

嗚天下

男尊女卑の舊思想に顔を赧くして怒り出し、男女同一の權利に廂髪を振り立て、叫ぶものは、世間の實際上、案外その數の多き嗚ア天下といふ恐ろしきものを計算せざるがためなり、

山の神の荒れ方、嗚ア大明神の祟り方、これが亭主たるものゝ身に取ツて豈それ手輕の災難ならむや、

嗚ア天下とは、旦那殿を掻き退けて何事にも喧しく罷り出で、その甚だしきは臀の下に敷いて押へ付け、ぐうの音も出させぬ勢ひの猛烈さ、殆ど男妾を抱へたるが如し、

一方また腫物に觸るが如く、その嗚アのため睨まれて一縮みに畏縮し、只これ戦々兢々として只これ命に従ひ、日夜に御機嫌を伺ふ野郎の哀れさは論するに足らず、この嗚ア天下

は姦通せぬを以て女の貞操と心得、これを恩に著せて亭主を取扱ふ工合、咬へて振るは優しい部にして、多くは嚙んで吐き出せり、

年が年中、咬へて振られ嚙んで吐き出さるゝ奴の面を見れば、あけても暮れても夫婦喧嘩する奴の面よりは猶更ら意氣地なく悲惨なり、あれでも男かと、

もし、女房に負けるものかと勢ひ込で喧嘩する奴を、世間普通の馬鹿とすれば、その勢ひもなく女房に襟首を掴まれて猫の如く手足を縮める奴、世間普通に出ぬけたる馬鹿の骨頂といふべし、

されど馬鹿の骨頂、かういふ男に限りて、嗚アの前は小さく居縮めど、外へ出れば寧ろ不思議に大きく強がりて、動もすれば他の女に手を出す事あり、繼子根性と一般、あまり厳しく扱はるゝ反動心なれど、それがため猶更ら家へ歸りて嗚アに宥められ、ぎゆうく胸倉を取ツて絞め付けられコヅキ廻され、手酷い時は面を引ツ搔かれ向脛を嚙られ、その上また飯も喰はされぬ憂目に逢ふ事あり、

第一また嗚ア天下の嫉妬は、いはゆる鹿の角にして、まツ直に生えず、四方に枝ありて、うかく飛び込めば他人まで突き立てらるゝ恐れあり、決して近寄るべからず、

さういふ不埒な鼻ア叩き出せといへば、言葉の上に何の雑作なけれど、そもくこの鼻アなるもの、容易に叩き出さるべき鼻アにあらず、實際また多年これに責め惱まされて習慣性の臆病となりし亭主、夢にも叩き出す勇氣のあるべきや、もし寢言にでもいへば、あけの朝、また猫扱ひに糞仕の悪い折檻と等しく、ぐつと首筋を押へられて鼻ツ柱を擦らるべし、

これを中流以上の家庭にありとすれば、面を引ツ搔かれ向脛に喰ひ付かれ或は首筋を掴んで猫扱ひにせられざるも、せられざるだけ猶更ら形勢不穩の慘憺を極めて、細君の眼は一種異様に輝き、奥様の御機嫌いよいよ斜めに睨み廻し、ぢりぐと攻め寄せ、やはくんと押し寄せ、加之も衣食住の苦勞なく、只こればかり専門的に微細の點まで觀察し研究せらるゝがため、主人の進退ますく谷りて、いやはや動きの取れぬ場合多し、まして細君に

腹心の下女あり奥様に手強い里方の後立あるが如きは、御主人いよく災難の極にして、社會の交際上に肥馬輕車を驅り自働車を走らせて意氣揚々たれど、お歸りの聲と共に第一まづ低氣壓の奈何を窺はざるべからず、もし出先に電話をかけられて、お越は御坐いませんといふ返事の後にでも歸れば、萬事こゝに休して、さア一大事なり、

妻をして妻たるべき以上に暴威を逞しうせしむるは、寧ろ良人たるべき資格を失へるがためにして、そもそも家庭なるものを作れる上に何等かの缺陷ありし反影と見るべきも、その反影に乘じ良人の資格を無視して蹂躪する妻なきにしもあらず、貞節の良妻も娶る時は無代價なり、持て餘しの悪妻も娶る時は無代價なり、天下これより至廉なるものなく天下これより高價なるものなし、

また妻は内助の功に止めたく、あまり世間へ飛び歩いて外助の功は却ツて有難迷惑なり、

まして内寶の文字を内暴の事實に現はされては、たまつたものあらず、内も暴れ外も暴れ出されては内憂外患、いよく良人は内外兩攻めの立往生なり、この立往生も、立工合が氣に入らぬとて叱られ、動けば動き工合が悪いとて叱られ、生涯その鼻アに叱られて終るもの、さのみ世の中の實際に珍らしからず、嗚呼、出すに出されず捨てるに捨てられぬ鼻ア天下の虐政に苦しむもの、もし文句をいへば忽ち捨らるゝ恐れあり、たゞ黙つて前世の悪縁と諦めるより外なし、まことに笑止千萬なる哉、

美人

昔と今と美人いづれが多きぞ、昔の美人は歴史に關し詩歌に傳へらるゝものあるがため、いはゆる絶世の美人多きが如く

想像すれど、實際上、たしかに今日は昔よりも多き筈なり、

男女七歳にして席を同じうせざる密閉主義の奥深き深窓に育ちて、隙間漏る風さへ厭ひし遠山霞の御簾ごし障子越しの昔と違ひ、開放主義の自由自在に、時と處も構はず出歩いて、知らぬ男と途中の不意に鼻を突き合はしても、はつと俄に驚かぬ今日は、數の上になつても、美人の現はるゝこと多き理にして、加之も女性的に進歩せる人工上の香粉美に滿艦飾を施し、孔雀の羽を擴げたるが如く、これ見よがしに四邊を拂ふ勢ひ、まして見る奴は戀愛病に特別の敬意を表し、近眼鏡に二三割も買ひ被るがため、猶更ら以て美人は多き筈なり、よく眼に立つ不具者にあらざるかぎり、もし水に投ずるか鐵道往生でもすれば、忽ち新聞記者に水死美人と稱せられ轢死美人と書き立てらる、實は美人の相場も案外に下れるがためなり、

結局、美容術の進歩と婦人の開放主義は昔より美人に出喰はす事の多きと共に、美人の標準また頗る廣義に解釋せられて、いよ／＼更に多きを加へ、ちよいと濫皮の剝けたもの、悉く皆これ美人の部なり、

鬼も十八、番茶も出花とは、到底その容貌の十人並に届かざる女を、青春の妙齡に對して聊か慰めし昔の同情なれど、今日は鬼でも蛇でも女の十八を天女の如くに拜し、番茶の出花を玉露の如くに有難がり、白く塗れる顔は一切これ美人にして、眼鼻立の奈何を問ふの暇あらず、肥えた女は曲線美の圓滿と心得、瘦せた女は姿勢美の理想と心得、たゞ皺さへ寄らず腰さへ屈まぬ女は總て夢が夢中に美人と心得、飢ゑたるものゝ食を選ばず舌鼓を打つが如し、

比較的、繪畫彫刻の美術思想は發達せるに、生きた女に對する美術眼のみ何がために斯くの如く退歩せしか、その眼底の曇れる所以を心理的に考究すれば、なさけない哉、淺ましき劣情の盛なるがためなり、

惚れた女は痘痕も笑窪に見ゆるといふ、或特殊の場合に於ける極めて少數の戀を際限なく擴めて、たゞ御用に立つべき女でさへあらば、これを美人なりといふ結論に近し、みめ容よりも心の優れたるを女の美といへど、願はくば無形の美と共に有形の美を備へて、錦上の名花、才色兩全を遺憾なき美人と稱すべきに、みめ容も醜く、心も美ならざる女を美人の部に數ふるは、あまりに男子の態度を自ら輕んじ過ぎて、玉石混淆の美人觀に醉へるがためなり、

花柳の巷に一時の嬌名を恣にして、美人の稱を得るもの、また多くは新聞雜誌の評判と寫眞廣告の普く行き渡れるがためにして、眞の美人は却つて案外その他の隠れたるところ

にあるやも知るべからず、わざ／＼金銭を浪費して、日夜の宴に招きながら、猶かつ美人の鑑定眼に迷ふ、出合頭の無價で女を我物にせむとする奴、うろたへて穿鑿の暇なく、どれを見ても美人の筈なり、

凡そ女の身に取ッては今日ほど全盛の機會なく都合よき運命なし、猫も杓子も、おかめも、すべたも、委細かまはず、べた／＼白く塗り立て、遠慮會釋なく美人の仲間へ押し出し、幸ひ眼の眩んだ生若い野郎どもを片ツ端より生捕るべし、

彼等は相手を選ばず一時も早く生捕られたいため、コスメチツクに頭を光らし、ハンカチ一フを香水に匂はせ、薄化粧の寝白粉まで施して、頻に野心勃々たる眞ツ最中なり、

金の番人

金の番人は、義理を缺き、人情を缺き、さらに恥を搔いて、この三個條を憲法と定めしものなり、

金の番人、また或意味に於て盜賊の番人なり、たゞ他に頼まれて番人たると自己の所有物に番人たるとの差あるのみ、

古き諺に槍持槍を使はずといへるは、年中その槍を持ちながら、いざといふ場合に主人が取ッて使ふためなり、金持また生涯その金を使はずして、多くは死んだ後で放蕩子息に湯水の如く使はる、

義理も缺かず人情も缺かず、世間に恥も搔かずして立派に富を得るもの、始めて有福者と稱すべきも、以上の三個條を敵と戦ふ如く無理無體に行うて、やう／＼金の番人となるもの、これを有財餓鬼といふ、

もし紙幣の表面に、これを得たる艱難の事實と所有者の姓名記入を許さるゝものとするれば、いたるところ一枚も鹿末にせられざる天下の通用物、たとひ生涯を金の番人に終るも、多少の面目ありて死後また名を残すに足れど、いづこの誰が手に渡りしやら知れぬものを生命に代へて守護しながら、一點さらに御恩も蒙らずして他人の持物となるに至つては、そもく人間これほど馬鹿げたる事なし、寧ろ大藏省の門衛となり造幣局の職工となり日本銀行の金庫番たるに知かず、いかに積んでも蓄へても一個人の財産、加之も自己の金を自己が番して日夜の恐怖病に襲はれ、びくびくしながら人を見る毎に盜賊と思ふが如き不安心の人生を送るもの、何等の無残なる天罰ぞ、あはれにも痛々しき次第ならずや、されど本人、決して哀れを感じず、まして痛々しき次第さらになく、世間の花見にも月見

にも自己は只これ金見を以て無上の快樂とし、食ふものも食はずに只お金様お金様と朝夕禮拜する點より考ふれば、この有財餓鬼、却つて他を無財餓鬼と心得、あはれに痛々しく思ふやも知れず、微毒で鼻の落ちた奴を笑へば、この鼻が一人や二人の女で、容易に落ちるものかと誇るが如し、

また金の方よりいへば、大に經濟界の勇士となつて、市場の出入、縦横の往來、盛に活躍し奮闘すべき筈を、運わるく此奴の手に捉へらるゝや否、其まゝ罪なき獄中に投ぜられてあたら手腕を闇々裡に葬らるゝ悲憤慨慄、いかに深きぞ、金が唸るといふは金の多きためにあらず、金そのものゝ用に使はれずして空しく埋めらるゝ不平の聲なり、たまく來りし金に一夜の宿もさせず、すぐに現在その場を追ひ立つるが如く使ふものは、あまり粗末に扱うて金に愛想を盡かさるゝ恐れあれど、また掴めば放さぬといふ執念深い

奴も、金の方では頗る残念至極なるべし、これを虎の子のやうに仕すぎても、金は迷惑を感じ、また繼子扱ひに仕すぎても金は恨みに思ふ、人間この金に對するほど難かしきものなし、親は爪に火を點しても、子は其火を消すもの多きがため、敢て流通の途は塞がざるも、中には親子二代、三代、若しくは子々孫々に至るまで金の番人となりて折角世間へ掘り出せし金を元の鑛山へ埋め返すが如きもの數からず、こゝに最も面白き一の事實談あり、六十七の二階借せる納豆賣、食ふと著るとを自分に働いた上に家賃の割前を出す女房なかりしたため、生涯を無妻に通して、自己が五體も敵のやうにコキ使ひし結果、やう／＼三百七十餘圓を蓄へ、これを悉く二十錢と十錢と五錢の白銅に取替へ、夜な夜な近處の寢靜まる頃、六疊の二階に隙間なく押し並べて人しれず樂

しみしが、或時また例の如く大小の銀貨を時ならぬ雪景色に並べ始め、あまり夢中に喜び過ぎて梯子段の降口に氣が付かず、次第に後へ後へと身を退くや否、まツ倒に落ちしが二階の金に心を取られて、この老爺なかく氣絶せず、されど多年營養不足の老體これがために病み付いて一月あまりの後、將に死せむとする最後に迫りながら、頻りに口を開き左右の手を擧げ何をか招くが如きを見て、平生この老爺の氣質を知れるもの、外に親類縁者はなし、もしやと例の銀貨を一掴その手に渡せば、さらさらと口に入れて呑み込まむとすれど咽喉に通らず、無念の極、ガリ／＼と抜け残る亂杭齒に嚙んで其まゝ息を引き取れり、これは金に執著心の恐ろしき極端を遺憾なく現はせし千萬人中の一人なれど、いはゆる金の番人なるもの、多少この納豆賣の最後に似たるところなきや、

猿智慧

猿は獸類中に最も智慧の多きものにして、人間中の最も淺薄なる智慧は猿に近く、つまり猿が人に似ずして人が猿に似たるを猿智慧といふ、
 猿猴中の進歩せる猩々狒々の前頭部と、人間中の退歩せる野蠻民の前頭部と、その大脳を包容せる形状の殆ど一致せるが如き點より見れば、わづかに毛の三本ほど相違せりといふ
 諺は、いかにも面白く趣味ありて手厳しく穿てり、
 猿が群をなして山より畑に忍び出で、夜陰に乗じて大根午房の類を偷むや、まづ一本を小脇に抱へて、後の一本を抜く時に前の一本を落とし、終夜間斷なく働きながら働く毎に左右のおのゝ一本づゝを落すがため、その曉に逃ぐる時は最後の一本を挿めるのみ、いま

だ會て一疋に三本を盗み去るものなしといふ、加之も終夜に荒されたる畑は悉く抜き捨てらる、一所懸命に自己の得るところ極めて小にして他に害を及ぼす事の案外に大なるもの、これを猿智慧といふ、

また猿を飼養して種々の訓練を與へ巧みに教へ込みし後、來客の席上に菓子を持ち出さしむれば、持ち出す途中に必ず其一個を偷みて背後に隠し、くるりと向き直りて立去る時の露現を知らざる滑稽、これを猿智慧といふ、

今日の複雑なる社會、あらゆる人生の方面、この猿智慧に類するもの、多しといはむか、
 尠しといはむか、いづれにせよ絶無なりとはいふべからず、中には猿の智慧にも及ばざる淺ましい奴が、いたるところ頻りに猿芝居を演じて、さも奇策縦横の如くに得々たる奴あり、もし本家の猿殿より見れば、乃公の方でなく彼奴の方が寧ろ三本ほど毛の足らぬ人間

と嘲るべし、

また猿は自己の尻の赤きを知らずして、同じ他の猿を笑ふといへど、つまり言語の通ぜざるがためにして、加之も只これ笑ふのみ、自由自在に談話の出来る人間が雙方より知つて知らぬ顔する不人情と不深切とに勝れり、注意すべき事を殊更に注意せずして他人の失策を喜び、救ふべき時に救はずして他人の失敗を祈り、甚だしい奴は抱き止める顔して川の中へ突き落とし、わざ／＼首吊の足を引ツ張りに行くやうな奴あり、猿の常に群を離れずして峰より谷へ相倚り相助け、手と手とを連ね足と足とを纏うて危急存亡を共にするが如きに比すれば、人道博愛を口に叫びながら心に刃を磨いて濟輩相陥れむとする人情の冷酷残忍、お猿さんに對して頗る汗顔の至極といはざるべからず、これも一の事實談なり、猿を飼へるもの、平生その猿を折檻するに手足を縛し竹の鞭を以

て背を打ちしが、或時この猿、佛前に供へし柿を偷み食うて主人に認めらるゝや否、忽ち去つて常に自己が折檻せらるゝ苧繩と竹鞭とを携へ來り、前に伏して悲鳴をあげし哀れさを見るに忍びず、主人は泣いて竟に山へ放ちしといふ、人なき時に偷み食ふは獸類の自然慾にして、猿の罪にあらず、されど主人の顔を見て其罪を知り、知ると共に自己の責め道具を携へ來りて、打たるゝものと覺悟せしは、いかにも哀れに立派なる態度ならずや、これと反對の人間は却つて堂々たる紳士面に卑怯未練な奴あり、もし一點の良心あらば白日青天の下に歩けぬ筈の破廉恥漢が、公衆の面前に反身となりて演説し、自己が罪惡を猫糞にして君士人を氣取り、法網の不備に乗じ世間の油斷に乗じて多々ます／＼太い事をする徒輩は今日の社會、あげて數ふべからず、實は獸類としての猿に笑ふところなく、寧ろ人間として猿に笑はれ猿に恥づべきこと尠か

らず、猿智慧を嘲笑するよりも猿智慧に嘲笑せらるゝ奴、まさかと思へば實際は思ひの外に多し、

笑

鼻 思 案

記憶力と思考力と判断力とは人間の最上部に位せる大脳の作用なるべき筈を、嗅覺と呼吸の一部を司どれる顔の中央、即ち鼻の頭に智慧のあるものと心得たる奴あり、これを鼻思案といふ、
鼻の頭あぶない智慧の置所、いかにも智慧の出所と置所を間違へば人生これほど危険なる事なし、
口で笑ふべきを、肩で笑ひ鼻で笑ふは、同じ間違うても、敵に向うて一種の攻撃手段とな

り、また時に取ツての策略ともなるべし、たゞ自己のために用ゐるべき大切の智慧を、頭より出さずして、鼻より出すが如きは、引き出し違ひも亦これ甚だしい哉、人事一般、ついで鼻頭の思案で事の成らざるは、成らざるが當然の理なり、
完全なる大脳の作用を遺憾なく盡しても、猶かつ事は志と違ひ易き人生に、ろくでもない獅々鼻を以て天晴れの智者たらむとす、楊子の尖端で石臼に穴をあけむとするよりも馬鹿な奴なり、
されど事々物々に手軽く鼻頭の思案を吹き出す奴は、ちよいと一見、さのみの馬鹿にも見えざるがため、たまくこれを真面目に受ける奴あれば、本人ますく鼻を蓋かして、天狗の輕業に等しく、何事も鼻頭の藝當に出来るものと心得、そのくせ實際は何事も一個として出来た事なく、我子を持て餘して、智慧のある馬鹿に阿父の困り果てるは、世間この

馬鹿なり、

馬鹿も馬鹿正直の馬鹿にあらずして、鼻頭思案の馬鹿は馬鹿に念の入り過ぎたる結果、いち／＼屁理窟を捏ね廻して常に絶えず伶俐ぶり、萬事を生嚙りの生意氣に取扱ひ生兵法に威張り散らすがため、をり／＼その鼻を引捻ぢられる事あり、

されど幾度その鼻を引捻ぢられても、鼻の形状のある間は此奴、やはり依然として鼻頭の思案を止めず、つまり馬鹿の地金に伶俐の鍍金せし奴なり、

いはゆる人造金と稱し或は金著せと稱して、天ぶらの金時計と金鏈とを帯の眞正面にブラ下げチョッキの胸に光らせ、見るものゝ眼には一見それと呵しく寧ろ哀れに思へど、恥かしくもない本人は得意満面、澄まし込んで人中に傲然たるが如し、

銀もニツケルも鍍も銅も時計の蓋と鏈に關せず時間を知るの便利は同一なるに、わざ／＼

殊更ら恥を隠さず恥を胸に光らして、自己と等しく世間を盲目と心得たる馬鹿さ加減、これが鼻頭思案の一例なり、その鼻頭にかけてたる金縁眼鏡も無論また頗る怪しいものといはざるべからず、

久米の仙人

川端に布を洗へる女の白き脛を見て通力を失ひ、雲の上より眞ッ倒に落ちしといふ久米の仙人は、これこそ架空の小説なるべきも、現に其舊跡と其墓とは京都に近き伏見の一端、御香の宮の片邊りにあり、

中書島の絃歌、撞木町の狭斜、墨染の里、今は殆ど昔日の華奢全盛を見る能はざるも、なほ紅燈の影を水に浮べて多少粉黛の情趣を残せるところに、女のため失脚の先例この久米

仙の舊跡を存せるは、古今の因縁、奇といふべし、されど世人その墓を知らずして、年々の京阪に遊ぶもの絶えざるに、風雨幾春秋の荒廢空しく捨て、顧みざるは實に申譯のない不埒千萬なり、風教の上に於ては常に聖賢を祭り忠臣義士を弔はざるべからざるも、實際の上に就ては今日の人情、何は借置き、そもこの久米仙の墓を粗末にして相濟むべきや、わざ／＼雲の上より女の白き脛を見ずとも、たゞ女の顔さへ見れば直に魂を失ひ足場を外して、いたるところ日夜に耽溺し墮落せる今日、心にもない聖賢を尊び忠臣義士の墓碑建設に寄附金の多きを誇るよりも、宜しく正直に久米仙の墓を掃うて、大に祭らざるべからず、現在の社會、みづから心に疚しからずして、聖賢の道を語り忠臣義士の靈を慰め得べきもの、世間それ幾何ぞ、今の天下を擧げて、殆ど皆これ久米仙の門下生なり、

川柳これを嘲りて曰く「仙人さまアと濡手で抱き起し」洗濯の濡手を拭ふ邊もなく驚いて、加之も空より不意に落ち來りて腰を抜かせし久米仙の名を知らず、たゞ仙人さまアと叫びし現狀、眼に見る如く罵り得て妙なり、但し今日の久米仙たるものは戸籍財産まで手落なく取調べられた女の前に落ちて氣絶すれど、抱き起されもせず其まゝ後足に砂を蹴散らして遁げ去らる、同じ墮落しながらも昔の本家本元に對して面目次第もなき事ならずや、また東都第一の繁華、淺草仁王門の傍に久米の平内が石像を祭れり、この平内兵衛は一代の驍勇を以て世に聞えしが、禪を學びて大に悟るところあり、多年の武勇に人を過ちし罪障消滅のため、生前、自己が仁王禪坐の體相を石に刻み、これを雜踏の地に置いて日夜衆人の土足に踏み付けられむとし、わざ／＼ふみつけの四字を添へしに、語音相通ぜし結果、踏み付けの眞意を變じて文付けの祈願に用ゐられ、この石像に艶文を結び付ければ必

す男女の思ひを遂ぐべしとの誤解より、今日なほ香粉の影を絶たずして、竟に叶はぬ戀路の守り神となれり、武勇禪定を以て終りし久米の平内また東に婦女子の因縁を免れず、西に於ける久米仙さらに苦笑を禁ぜざるべし、

元來この久米といへる姓は歴史上、我國の古代に武を以て君を成るべき兵の總稱なり、されど世態人情の幾變遷を経來りて、東西おのゝ女子のために禍せらる、たゞ西の久米仙は美人の内股を見たる自業自得の墮落に引き替へ、東の久米平内は生前の眞意を誤られて氣の毒の至りといふべし、

古の久米は今日の軍人なり、今日の軍人は古の久米なり、古今その世を異にすれど兎角この久米は女の縁を離れず、石像の物堅き平内さへ男女の戀に圍繞せらるるを思へば、始めより物柔かく久米仙を學ぶもの、たとひ名は國家の干城なりとも厳しき軍人の類々と

して墮落するは怪しむに足らず、まして軍人ならざるものに於てをや、
いづれの方面より見るも今日の社會は、聖賢君子の眞似をする資格に缺乏せり、萬事を差置い、第一まづ墮落の本尊たる久米仙のため大に其墓碑を新にし其祭典を行はざるべからず、これ寧ろ人情の裏面を偽らざる時代思想の一大表現なり、

粧飾の人間

生まれながらの天真爛漫を、あまりの無造作と無遠慮とに發揮せる裸體時代は兎も角、人類の向上に伴ひし文物修養の今日、人は或程度まで、粧飾せざるべからず、
されど現在の社會は、人間の粧飾にあらずして粧飾の人間なり、すべての化粧品は人のために製造せられずして、人が總ての化粧品に製造せらるゝ世の中となれり、男女いづれも

殆ど舞臺面の俳優たらむとするが如し、その極彩色を剥がして樂屋に於ける木地を現はせば、恐らく人間の價値を完全に備へしもの、世間それ幾何ぞ、
 いかにか詩人は野に咲ける花の露を吸うて自然を叫び天地山川の自然美を尊ぶも、お祭り騒ぎに等しき社會の現象は、日夜ます／＼人為的粧飾の不自然に狂奔し雷同せむとす、
 今日の交際費用なるもの取りも直さず粧飾費用なり、人間それ／＼自己の境遇に應じて品位を保たむとするの粧飾にあらず、出ずとも濟むべき交際場裡へ無理に罷り出で、虚榮を誇らむがための粧飾なり、都下の一町内に蕎麥屋のなきところありとも、日々新聞紙上に化粧品の廣告を掲げざる時なし、
 勢ひ婦人の犯罪は多く虚榮心より生じ、男子また婦人の虚榮心を迎へむがために罪を犯すもの多し、加之も男女お互に實は四苦八苦の滿艦飾を施して、雙方より負けず劣らず魚を

釣るが如くに釣り合はむとす、蓋し一種の欺し合なり、釣られて欺された奴に文句をいふ資格なく欺して釣つた奴に罪も罰もなし、只お化粧の巧拙と口前の如何にあるのみ、
 家庭庭園の粧飾、書畫骨董の粧飾、衣服調度の粧飾、容貌態度の表情的より時計指環の流行に至るまで、今日の社會は餘儀なき生存競争の上に入らざる粧飾の競争を行ひ、あけても暮れても二重の競争に追ひ廻さる、たゞ法律に觸れざらむとするのみ、固より道徳を顧みる追なく、出来るだけの悪い事をする奴の絶えざる筈なり、今日この渦中にありて君士人たるは、世を擧げて質朴なる昔日の君士人たるよりも頗る難し、よくしたも哉、殆ど君士人の種切となれり、
 善玉の種切は悪玉の繁殖にして、その悪玉また遺憾なく粧飾を施すがため、昔の如く露骨に容易く現はれず最も巧妙なる偽善の皮を被りて天下に横行す、今日の粧飾は豈それ外面

のみを誤魔化せる物質上に止まらむや、油斷大敵、うかく善人にも安心すべからず、人を見れば盜賊と思への諺、何の失敬に當るべき、どしどし遠慮なく到るところに使うて可なり、

博愛を標榜する慈善事業に却つて案外の惡辣なる利慾主義あり、國家を以て任ずる政治家に鼻持のならざる腐敗漢あり、慷慨の志士に無頼の徒あり、知名の紳士に暴戻の輩あり、正直を賣物にして素根性の太い奴あり、仁俠を看板にして拘漢に似たる奴あり、天晴の學者面に驚くべき無學無識の奴あり、涙脆き同情者に呆れ返る嫉妬偏執の奴あり、實業家に詐偽師あり、風流家に千三屋あり、詩人の俗物、文士の文盲、經濟家の借金、宗教家の淫猥、その他いづれも今日の社會かゝる類を挙げ來れば、皆これ一種惡用の粧飾術を以て自己の裏面を包み世間の外面を欺けるもの、ろくでもない南瓜面を白壁の如くに塗り立て

て美人と誇れる女は、寧ろ粧飾の淡泊にして罪の淺きものといふべし、

矛 盾

この矛、天下いかなる盾をも貫くべしと叫び、この盾、天下いかなる矛をも防ぐべしと叫び、その矛と盾を同じ店頭に商へるものありとは、支那より來りし矛盾の傳説なり、されど我國近來の實例は、かゝる迂遠の面倒臭き解釋を用ゐずして、一言の下これを直にホコトンと讀み去りしが如き、讀みしものゝ學と不學とに關せずして自然の結果、寧ろ洒落を極めたる皮肉の奇警なり、

加之も今日の社會に於ける人事一般は、殆ど皆これ此ホコトンを以て成れるが如し、藩閥打破を目的とせる政黨の藩閥主義に肝膽相照らし情意投合し甚だしきは藩閥の爪牙と

なり走狗となるが如き、ホコトンの最も大なるものにして、その他いづれの階級にも老朽を排斥しながら實際いづれの階級も禿頭の老爺に血氣の若い奴が追ひ廻されコキ使はれて戦々兢兢たるが如き、日々夜々の生活難に堪へ難き泣面を吼えながら不思議に案外の高價なる微毒を喜んで買ひ込む奴の多きが如き、平民主義を叫ぶ奴の華族めいたる家庭、自然主義を振り廻す奴の不自然なる行爲、社會の耳目たる新聞記者に世間しらすの勘からざるが如き、人情の機微を穿つといふ小説家に人情の何物たるを解せざる没理漢の多きが如き、いはゆる新しき女に却つて人しれぬ古疵あるものゝ多きが如きは、近來に於けるホコトンの頗る顯著なる實例なり、

諸君、我輩は敢て議論を好まないといふ議論家、これは君、秘密中の秘密だよと念を押して誰にでも饒舌り散らす秘密家、僕は未だ曾て人に迷惑をかけた事がないと自慢しながら

頻りに諸方を借り倒す奴、乃公は生來どういふもんか氣が弱くて困るといひながら萬事にづう／＼しく押の強い奴、女嫌ひの妾狂ひ、男嫌ひの姪婦、常に藥を放さぬ衛生家の牛飲馬食に等しきもの、乃至また浴後の手拭で下駄の泥を拭く潔癖家の如きものを舉ぐれば、殆どホコトンの際限なく、つまり人蔘を飲んで首を縊るといふ昔の諺は、いたるところ却つて寧ろ今日の社會に多し、

されど萬事その場の都合次第で便利至極を専らとせる今日の人情、お互に此ホコトンを以て世間普通の當然と心得、いやしくも眼前の計算に關し自己の損益に關せざれば、たとひ公衆の面前に驚を鴉といふも怪しまれず、固より味噌と糞とは同一にして、すきな熱を吹き合ふ手前勝手の手合はせに恥も外分もなく、口で堅い約束の間違ひぐらゐる豈それ間違ひの内ならむや、まして主義の一定せざると議論の前後めちやく／＼になるが如きは、いはゆ

る今日の手腕家と稱せらるゝ紳士としてのホコトンにあらず、彼等が最も適切に自覺せるホコトンの解釋は、日夜これほど智慧を絞つて抜け目なく悪い事をした割合に、儲けも儲けからぬといふ不足の點にあり、

なるほど、取るものは石地藏の胸倉も取りかねまじき彼等の深酷なる惡辣を以て、螻蟻の餌を運ぶが如き馬鹿正直の金持に及ばず、動もすれば借金に攻められて堂々たる邸宅を執達吏の競賣に附せらるゝが如きは、いかにも本人の料簡より天下これほどのホコトンなかるべし、

つまり社會の進歩は世間の横著に伴ひ、人間の向上は次第に面の皮の厚くなる意味を含みて、わるく發達せる個人主義の結果、法律の進むに従ひ犯罪の進むが如く、此ホコトンまた由來の平凡なるホコトンを以てホコトンの價値なき世の中となれり、

顛倒

和歌の徳は、眼に見えぬ鬼神を泣かせ天地を動かすべしといふ自漫を癪に觸へて、これを笑ひし狂歌に「歌よみは下手こそよけれ天地がうごきいだして堪るものかは」

天地いまだ顛倒せざれど、天地間に於ける人事一切は、そろ／＼顛倒し來れり、

主客顛倒、冠履顛倒、いづれも只これ文字上の形容詞なりしが、もはや今日の社會それ以上の實際を演じ來りて、事々物々に狼狽へ易き近來の傾向、すぐに上を下へと立騒ぐ心氣顛倒の如きは、敢て珍らしからず、いたるところ殆ど毎日の出來事なり、

絶えず頻々として實例の多き政治上の顛倒は暫く論ぜず、第一に古人の喧しき師弟の禮は地を掃うて、學校の講師教員は生徒のため喧嘩腰に窘められ、うか／＼すれば忽ち追ひ出

され叩き出さる、人倫の最も嚴格なりし親子の間また時代思想の新舊衝突に遠慮なく顛倒し、動もすれば警察の厄介となり裁判所の訴訟沙汰となる、姉妹兄弟の如きは長幼順序の顛倒さらに甚だしく、兄を蹴飛ばし姉を蹂躪るは朝飯前なり、わけて夫婦の顛倒に至りては、いはゆる臀に敷かれて辛抱するぐらゐの生優しい事では済まず、十中の八九、良人は妻の家來にして只これ命に従ひ、その虚榮心を迎へ贅澤費用を負担せる忠實の労働者なり既に過去の遺物となりし貞節の如き野暮なるものを以て今日の夫婦間を律し得べけむや、臺所に追ひ使ふ下女さへ主人に小言の權利なくして倒まに御機嫌を取らざれば、さつさと手荷物を片付けて出て行かるゝ世の中なり、

石が流れて木の葉が沈むといふは、古き顛倒の諺なれど、七十の禿頭を光らした老爺が孫のやうな美人を携へて浮かれ歩き、二十歳前後の生若い奴が厭世のために死を求むるが如

き顛倒は、今日の實例に尠からず、白髮染の半婆が手當り次第に男の不自由なくして青春の處女に失戀の多きが如き、また近來の例に珍らしからず、べこ／＼頭を下げる事の低い奴が段々と高く出世して、思想の高尙なる人間が次第に社會の地位を下り行くが如きは、最も概數すべき今日の冠履顛倒なり、わざ／＼金を使うて藝妓の肱鐵砲を喰ふが如き馬鹿野郎は、お座敷の主客顛倒にあらずして魂の顛倒するがためなり、

先生

學識の奈何に關せず首尾よく肩書さへ取れば、博士も先生なり、學士も先生なり、大學の講師も小學の教員も先生なり、免許さへあれば危險な醫者も先生なり、鑑札さへあれば大道の易者も先生なり、辯護士も先生なり、小説家も先生なり、新聞記者も先生なり、繪畫

彫刻その他一切の美術家も先生なり、怪しげな祈禱の行者も先生なり、張扇の講釋師も先生なり、出來星の新俳優も先生なり、小田の蛙の啼き損ねたるが如き浪花節も先生なり、お茶の先生、花の先生、裁縫の先生、料理の先生、あらゆる遊藝の先生、あらゆる武術の先生、碁將棋の先生、歌俳諧の先生、わけの分らぬ先生、正體の知れぬ先生、數へ來れば千差萬別の先生を以て鼻の突き合ふ今日、先生の範圍また廣い哉、
 加之も今日この先生の中には、おい先生と呼べるゝお手輕の先生あり、あの先生かと至極安直に扱はるゝ先生あり、困つた先生だよ、呆れた先生だよ、始末に終へぬ先生だよ、先生それで濟む料簡かと眞正面より逆捻を喰ふ先生あり、先生ちと氣を付けるが宜いぜと面の皮を引剥かるゝ先生あり、全體まア先生どうする決心だと反對に説諭せらるゝ先生あり、邪魔になるよ先生そこ退きなと吐り飛ばさるゝ先生あり、いくら何でも先生これくら

ゐの事は出来るだらうと追ひ使はるゝ先生あり、先生それは眞實ですかと萬事に念を押して疑はるゝ先生あり、お氣の毒にも先生の價値また下落せる哉、
 一説に曰く、先生とは讀んで字の如く別に大したものにあらず、たゞ半歳でも三月でも我より先に生れたといふ年長の意味なりと、また一説に曰く、先生とは人を教へ人を導くやうな人間にあらず、どうか斯うか兎も角も先づ生きて居るだけの意味なりと、さらに一説これを解釋して曰く、失禮な事をいふ勿れ、先生とは、セツセと一所懸命に働いて他人のために心よく貧乏する仁者の總稱なりと、こゝに至りて先生また尊い哉、

大將

陸軍大將にあらず、海軍大將にあらず、いはゆる今日一般の先生と同一の意味に於て、事

なき時は、おい大將、どうだい大將と軽く肩を叩かれ、もし事ある時は、たのむぜ大將、一番こゝは是非とも君に限るといはるる大將なり、世間この大將は、寧ろ敬意の反語を呈して、その乗じ易く與みし易きを馬鹿にせし侮辱の極なれど、得意満面の本人、これを有難く自慢に心得て、お祭り騒ぎの樽天王に等しく、わい／＼人に擔がれ、人に持ち上げられ人に翻弄せらる、加之も一朝お祭りが済めば既に用なく、其まゝ其處に捨てられて、さらに怒らず恨まず、文句もいはず腹も立てざるところは、いかにも便利至極のおい大將に出来たり、今日の社會、いづれの方面にも、この大將なきところなく、いづれの階級にも、この大將を荷ぎ廻らざるところなく、お祭り騒ぎの樽天王、只これに尤もらしき理窟を附けて一時の外観を粧ひ形式を飾れるのみ、つまり年と共に進歩せる兒戯なり、

いかに平生は仔細らしく高慢に構へて眞面目なるも、大人は小兒の成長せしものなり、堂堂たる髯面の紳士が空を仰ぎ口を開き手を鳴らしながら瞬間消滅の花火に我を忘れて喜ぶ工合、實は家に歸りて妻子に對する威嚴いづれにありや、正しく餓鬼どもの本性を其まゝ露骨に現はせるものといふべし、お山の大将は決して小兒の遊戯のみにあらず、試みに一國の選良を集めたる衆議院の開會中、これを政黨政派以外の冷靜なる頭腦に訴へて見よ、主義主張のために熱狂するは勢ひ自然の結果たるも、木札を叩いて喚くやら騒ぐやら、足を踏み鳴らして踊るやら跳ねるやら、をり／＼殴り合を始め掴み合を始め、まるで駄々兒を收容せるが如し、その僅に喧騒の止みし時に青票と白票とを持ちて、だうだう廻りをするが如きこれを思へば天下を擧げて兒戯に類するも、敢て怪しむに足らず、只おとなしく喧嘩せずして無事に遊べば可なり、あまり惡戯が過ぎて怪我せざるを僥倖とす

べきのみ、

べらぼう

べらぼうは筥棒の間違ひにして、飯粒をそくひ糊にする時、竹にて作れる筥の棒を用ゐるがため、世の中の穀潰しといふ意味なりとは、落語家の説明なれど、生きて用なき人間を罵り得て妙、頗る面白し、

古來、飯袋子といふ語も亦この穀潰しと同じく、腹中さらに何物も藏せず、只これ外より詰め込む飯の袋にして、白き飯を食み黄色の糞をするばかりの藝當、いはゆる徒食の遊民を罵るに、糞尿の製造機械といふが如し、

天下に飯袋の多き、年々歳々、べらぼうに増加し來りて豊凶の平均收穫、我國に於ける五

千萬石の米と二千萬石の麥では足らず、さらに殆ど千萬石の外國米まで輸入して盛に糞尿の製造を奨励せり、

日夜この盛に製造せらるゝ糞尿中、いはゆる無爲無能の穀潰しとならずして、實際の有利有功に排泄せらるるもの、果して幾何ありや、つまり飯袋とならずして生存活動の意味を明かに證し得らるゝもの、果して全國民の幾割ありや、東京市民のみにて一日に二萬俵の米を食ふとすれば、その二萬俵に對する肥料以外、果して幾人の有用人物を養ひ得たりや乞ふパンを與へよとは、乞食の如くパンを嚙りて満足するにあらず、パンのために生命を保ちて何等か意義ある存在を營まむとするにあり、たゞ飯を食うて死ぬだけの藝なれば、國家の經濟上、始めより食はさずして其まゝ見殺しにするの簡便なるに如かず、されど生きて益なく殺されて惜しからざる奴が、あけても暮れても生活難を叫びて、食へぬ食へぬ

と立騒ぐ世の中、實にべらぼうの至りにして、また蒼蠅く面倒なる次第ならずや、

のツペらぼう

のツペらぼうとは、眼も鼻も口もない化物のやうなれど、實は眼も鼻も口も満足に揃ひながら、世間へ押し出して一人前の用に足らざる奴をいふ、人に合はすべき顔のない事を、いかにも面目ないといふは、即ち此のツペらぼうなり、のツペらぼうの一轉語、のツペりした面とは、寧ろ世間普通より眼鼻立の美なる意味にして、俗にいふ俳優めいたる色男を皆これのツペりした奴とすれば、のツペらぼうの化物にあらずして、只その面に備へたる雑作の有つて用なき意味と知るべし、耳は木耳の如く、眼は節穴に等しく、鼻は顔の中央にあるといふだけの事、口は開いても

餌食を運び込む外に時の挨拶さへ出来ぬといふ人間、さのみ世間に珍らしからず、いはゆる馬耳東風、眼球の光りし明盲、いかに高くとも絶えず引捻ぢられて凹む鼻、どこへ出ても人並に口のさけぬ奴、また世間に尠からず、但し元來ののツペらぼうは今更ら致方のない天性にして、寧ろ憐れむべき同情の點あれど萬事に横着なる今日の社會、最も憎むべきは、わざと殊更らのツペらぼうになる太い奴あり、

自己の不利益な事は一切さらに關せず耳を潰して俄聾となり、義理人情の捨て、置けぬ事も一切さらに顧みず見て見ぬ振をする明盲となり、常に自慢の高い鼻も損する事には木で括つた如く少しも蠢かさず、饒舌る事は人一倍に喧しい口も責任の場合には忽ち閉ぢて啞となり、結局、のツペらぼうを以て自己の要害を固め處世の祕術とせるもの、動もすれば今

日の金を持つ奴に多し、
大人の愚なるが如きは尊敬すべきも、いかさまの多い今日、うか／＼のツペらぼうの馬鹿面に油断すべからず、太い奴の細く出る時は必ず何等か自己の義務と負擔とを免るゝ時なり、

屁理窟

屁は音のみありて形なく臭を發するもの、その屁を理窟に冠すれば、いたづらに害のみありて何の益なく無用の論を起すものなり、
その一例を擧ぐれば、泊と晒の文字を反對に間違へるものとし、水に洗ひあげて白くするがため泊の字をサラシと讀むべく、日が西に入れば旅人の宿を求むるがため晒の字をトマ

リと讀むべし、動くべき動と呼んで牛馬は止り止まるべき止と呼んで牛馬の動くは如何、時鳥の文字これは時を報じ時を告ぐる鳥なるがため寧ろニハトリ(鶏)と讀むべし、細根大根とは何の意味ぞ、廣小路と稱すべき筈なしといふが如き類にして、常に絶えず、萬事の筆法を世の中に振り廻して、得々たるもの、これを屁理窟といふ、つまり馬鹿の自慢する小理窟なり、

この馬鹿さらに一步を進めば、ろくでもない屁理窟に用のある忙しい人間を困らすのみならず、をり／＼また物知顔に人を教へて曰く、正月は年の始めばかりと思ふべからず、これを土地の名稱にも用ゐてオホサカ(大阪)と讀むべし、正は即ち正親町の正にして、月は即ち月代の月なりと、

千萬言の名論卓説も一個の事實に如かざる今日、この流を以て人生の百般に當らむとす、

固より天下に通用すべき筈なけれど、さも仔細らしく自己だけの智慧を知らざるところに捏ね廻して、これを唯一の論鋒とせるもの、正月を大阪と讀んで誇るは多少まだ屁理窟の生優しい部なり、もし圖に乗れば黒犬を雪の夜の提灯と讀んで頑張る奴あるかも知るべからず、否、實際それに類せる屁理窟は最も世間に多し、つまり屁理窟は一種の病氣なり、事の利害に關せず得失に關せず、たゞ人の顔さへ見ればこね廻して以て快とせるもの、小兒の粘土を弄ぶが如し、

糞度胸

理窟に屁を冠し度胸に糞を冠す、いづれも汚れを厭うて士君子の顧みざる捨物なれど、これを拾うて我物貌に得々たる奴、どうせ人間の屑なり、

同じ士君子の捨物も、屁理窟は聊か滑稽を帯びて、また時に多少の趣味あるのみならず、元來は罪のないものなり、たゞ糞度胸に至りては、人情を跳飛ばし道理を踏み破りて、世間一切を糸瓜の皮とも思はず、もし進退こゝに谷れば、サア殺せと大の字になる奴、つまり自暴自棄の極なり、

されど進退も谷らず自暴自棄にも至らず、まだ充分に反省の餘地あり悔悟改悛の時日ありながら、始めより捨鉢の糞度胸を据ゑて掛る奴、世間に尠からず、いはゆる今日の膽力家と稱せらるゝもの、實は道理を重んずるための膽力にあらずして、多くは皆この糞度胸のある奴なり、

手前味噌の甚だしきは、臭氣紛々に堪へざると一般、その味噌に似たる糞を以て惡度胸を据ゑた奴、もはや手の著けやうなく、呆れて人の相手にせざるを、本人ますく調子づい

て四方に敵なき顔色、誰に憚り何を遠慮し、どいつ此奴の容赦あるべきや、いたるところ大膽に恐るゝところなき筈なり、

廉恥心なきもの廉恥に責められず、徳義心なきもの徳義に苦しまず、ぶツても叩いても何の效なく、この糞度胸を以て傍若無人に天下を横行す、動もすれば世人これを誤りて豪いものゝ如くに心得、細墨を以て律すべからざる大物の如くに思ひ、輕學輕賢の徒これを親分とし頭目として、その糞度胸を學ぶもの多し、加之も下手に學び損ねて糞の突ツ張りにもならぬ奴、また頗る多し、

ぶる奴がる奴

學者ぶる奴、君子ぶる奴、大人ぶる奴、名人ぶる奴、才子ぶる奴、策士ぶる奴、色男ぶる

奴、豪がる奴、強がる奴、伶俐がる奴、通人がる奴、黒人がる奴、上手がる奴、凡そぶる奴とがる奴の種類を挙げれば、いたるところぶるとがるとで満ちたる今日の社會、あまり多きに過ぎて、寧ろぶらざる者とがる者を數へ盡すの早きに如かず、

元來このぶるとがると號、まツかの質物にして、いはゆる羊頭狗肉の手段、道德上の竊盜罪なり、

學者でもない奴が學者の面を被り、君子でもない奴が君子の風を粧ひ、豪傑でもない奴が豪傑の皮を着て、盛に世を欺き平氣に人を詐るもの、つまり今日の社會は欺き易く偽り易く、わざ／＼實際の學者たり君子たらざるも、ぶるとがるとで充分に大手を振ツて通れるがためなり、

質造紙幣は忽ち檢舉せられて、質造人物は日夜に増加し案外に歡迎せらる、ぶる奴とがる

奴より見れば、なるほど實際の本物たるは馬鹿げたる徒勞にして、指環も時計も金著皮と稱するもの、飛ぶが如くに賣れる筈なり。
 加之も他人の贖物を穿鑿すれば、自己の贖物も詮議の憂目に逢はざるべからず、そこは双方ともに如才なく、ぶる奴とがる奴の以心傳心、お互に言はず語らずして、うよくくと蟲の湧くが如くに生じ、びか／＼と皮一重の外面に光る奴の多きを知るべし、
 同じぶるとがる中にも、面の裏表さへ判然と分らざる女の澄まし込んで頻りに美人ぶり美人がるは、電車に汽車に往來に乗り合はせ擦れ違うて、をり／＼嘔吐を催す事あれど、取るともいはざるに金持の金を取られざる用心のため、金持ぶらず金持がらざるよりは、寧ろ却つて哀れに優しく癩に觸ること妙し、

とまどひ

とまどひの文字、戸迷ひなるべきか、また語音のまゝ戸纏ひなるべきか、或は遠迷ひなるべきか、乃至また度迷ひなるべきか、
 いづれにせよ、とまどひとは通俗の解釋上、寢惚けて俄に方角を失ひ、とんでもない場處に狼狽へながら、うろ／＼する意味をいふ、
 いかにか馴れたる我家も、ぐツすりと寢込みし熟睡中、火事盜賊その他の非常に驚いて、がばと跳ね起きし一刹那、物に躓き戸に突き當り障子に支へられ、眼前の出口を失うて壁を引き搔くが如き類は、世間の慌て者に随分あり勝の事なり、
 されど世間の實際を見れば、青天白日の下に明かなる兩眼を光らして、とまどひする奴あ

り、甚だしきは沈思黙考の後、悠々と沈著いてとまどひする奴あり、その最も滑稽なるは一時の出来事にあらずして、人間の生涯をとまどひする奴あり、起きて居て身を搔くものなきに、寢惚けずしてとまどひするもの多きは、そもく何のためぞ、

とまどひの文字、戸纏ひとすれば、おのれが閉め切りし戸の前に纏ひ付いて外へ出られぬ意味なり、もし遠迷ひとすれば、つい脚下の近道を知らずして徒らに無用の迂廻する意味なり、度迷ひは事々物々に度を取り失うて周章狼狽する意味なり、以上この寢惚け業を、殊更ら白晝に演ずるもの、ふしぎや才智の發達せる今日の人間は、社會の未開に屬せる昔の人間よりも却つて多し、昔は人生の四方に障壁なくして生存上を廣く開けつ放しにせるがため、うろく狼狽へて

とまどひするもの尠く、今日は人間の増加と競争の激烈より、互に處世上の要害堅固を主とせるがため、いざといふ場合、その方角を失ひ自由を失うてとまどひするもの多きに依れるか、

もし人生の行路に山あり川あり里あり海ありとすれば、川へ行く奴が山へ迷ひ込み、里へ出る奴が海へ顛げ込で藻掻けば藻掻くほど出道なく、あせれば焦るほど浮ぶ瀬なく、生涯を煩悶と徒勞とに終るもの、いたるところ今日の社會に満ちて、その最も多きは職業に對するとまどひなり、

生活難は生活にとまどへるもの、就職難は就職にとまどへるもの、利にとまどひ、戀にとまどひ、名譽にとまどひ、學問にとまどひ、その他あらゆる總ての上に於て、凡そ今日の人間ほど狼狽へるものなく、とまどへるものなし、

とまどひの最も危険なるは死生の間^{あひだ}に於けるとまどひなり、あくまで生きて働くべき人間^{にんげん}が、わづかの事に世を厭^{いと}ひ人を恨^{うら}み、自己を捨て、瀧壺^{たきつぼ}にとまどひ鐵道の線路^{せんろ}にとまどひ乃至また海川^{うみがは}にとまどひ木の枝にとまどひ、ピストルにとまどひ劇薬^{げきやく}にとまどひ双物三昧^{ふたものさんまい}にとまどふ、これ等はとまどひの程度^{ていど}を越えて血迷^{ちまよ}へる奴^{やつ}なり、

江戸ツ子

いはゆる江戸ツ兒^{えどつこ}とは、いかなるものぞ、べらぼうの巻舌^{まきじた}、べらんめエの一語^{ひとこと}を以て浮世^{うきよ}の萬事^{ばんじ}一切^{いっさい}を結了^{けつりょう}し、鮪^{まぐろ}の刺身^{さしみ}と鰯^{いわし}と天ぷら^{てんぷら}とを以て意氣地^{いきぢ}を養^{やしな}ひながら、事々物々^{じじぶつ}に膽^{いだ}を潰^{つぶ}して驚^{おどろ}き、朝湯^{あさゆ}に飛び込み^{とこみ}木やり^{きやり}を唄^{うた}ひ、ふざけるな馬鹿^{ばか}にするなを毎日^{まいにち}の口癖^{くちぐせ}に連發^{れんぱつ}するもの、女^{おんな}の特長^{とくちやう}は雨後^{あまごり}の日當り^{ひあた}へ傘^{かさ}

を乾^ほし下駄^{くだ}を洗^{あら}うて並^{なら}べるのみの藝^いなりとは、あまりに江戸ツ兒^{えどつこ}を笑^{わら}ひ過ぎたる酷評^{こくひやう}なり江戸ツ兒^{えどつこ}の生れ損^{きな}ひ金を溜^{たの}め、とは古^{ふる}き川柳^{せんりう}の江戸自慢^{えどじまん}にして、宵越^{よるこ}しの錢^{ぜに}を持たぬといふ肌合^{はだあひ}も、大川^{おほがは}で尻^{しり}を洗^{あら}つた如^{ごと}く、さつぱりと氣持^{きもち}よけれど、實^{じつ}は宵^{よる}を持ち越^こすほどの錢^{ぜに}なき證據^{しやうこ}にして、つまり江戸ツ兒^{えどつこ}は貧乏^{びんぼう}人の寄合^{よりのあひ}なりといふ論鋒^{ろんほう}、また餘^{あま}りに江戸ツ兒^{えどつこ}を見^みくびりし言葉^{ことば}なり、

眼^めに青葉^{あおは}、山^{やま}ほととぎす初鯉^{はつがつせ}、これは江戸ツ兒^{えどつこ}の聊^{いさ}か風流^{ふうりう}に金持^{かねもち}らしき點^{てん}あれど、その初^{はつ}鯉^{がつせ}も瘦^{やせ}我慢^{まん}と負惜^{まげ}しみの結果^{けつこ}にして、鼻^{はな}アの拾^{あは}せぶち殺^{ころ}せし涙^{なみだ}の種^{たね}とは、また憐^{あは}れに痛^{いた}々^{たく}しき次第^{しだい}ならずや、

火事^{くわじ}に喧嘩^{けんくわ}に中^{ちゆう}腹^{はら}、これも江戸^{えど}の名物^{めいぶつ}といへど、實^{じつ}は尾^おのない彌次馬^{やじうま}の飛び出^たす意味^{いみ}にして、喧嘩^{けんくわ}また手^ては早^{はや}けれど、飽^あくまで組^ぐんで勝負^{しやうぶ}を争^あふ二枚腰^{まいこし}なく、さア承知^{しょうち}しねエぞ

といふ中ッ腹は、只これ一時の痛癢のみ、

江戸ッ兒は五月の鯉の吹き流し口先ばかり腸はなし、いかにも天真爛漫として腹中に何物も置かざる無慾淡泊を示せど、ふは〜と軽く竹竿の風に膨らみて調子づく工合、寧ろ男として腹の底の見え透いた貫目の足らざる證據ならずや、

由來また江戸ッ兒の強さは他國に通用せず、北は千住を境とし南は品川までの強さにしてたゞ江戸にある間だけの空威張なり、一朝もし千住と品川とを越えて旅の空へ向へば、すぐに心細く遁げ歸る工合、凡そ天下に江戸ッ兒ほど弱きものなしとは、江戸の兄イに横面を擲られし田舎者の悪口ばかりにあらず、實際この江戸ッ兒は、飼犬の門口に於けるが如き點ありといふべし、

つまり江戸ッ兒を善意に解釋すれば、心に濁りなく物に遠慮なくして稗氣を帯びたる人間

なり、

されど昔の江戸は今日の東京と變じ、従うて江戸ッ兒また元の江戸ッ兒にあらず、自然の大勢に征服せられし結果、或意味に於ては江戸ッ兒なるもの既に餘儀なく消滅せり、

江戸ッ兒の總仕舞に残りし勇み肌の八公や熊公より見れば、いろ〜癩に觸つて残念な事は多かるべきも、そこは持前の未練氣なく、時世と時節だ、仕方がねエと諦めて、ざつくばらんに酒でも飲むべし、

上方贅六

上方とは四方これを仰いで上るといふ玉城の意味にして、上洛の文字、いはゆる平安朝以來の京都なりしが、今日の上方は無論、いふまでもなく輦轂の下に於ける東京なり、現に

昔の東下りといへる、改めて東上と稱せり、
 されど元の方なる京都は、今なほ依然として上方の名を専有し、その他國より入り來るものを總稱して、お上りさんといふが如きは、いかに山水の明媚と美人の窈窕とを以て誇るにせよ、實は今更ら功能のない古證文を振り廻して威張るが如し、
 加之も今日、上方は京都のみならず、大阪をも含みて京阪地方に於ける一般の總稱となせり、

この上方を代表せる人間に贅六といふ奴、そもくいかなる身分なりしか、久しく其名を唄はれながら今日に至るまで出處來歴さらに知るものなく、たゞ上方贅六といへば京阪一體の人に對する言葉にして、その言葉また敬語にあらず、寧ろ侮辱の意味より出でたる嘲笑冷語の極なり、

なんだい、氣の利いた面をしてるが贅六だとさ、道理で野暮に吝臭いといはるゝ上方贅六は、總ての上に向ふ面の意氣を以て立つ江戸ッ兒と正反對なり、

されど正反對なるがために金持あり分切あり、事に臨んで執念深く、物に對して取損ひなく、義理人情よりも第一まづ算盤を弾いて、人間萬事を思召より握り飯と心得、ちよいと出るにも裾の切れるを恐れて尻をからげ、豆を食ふにも袖口の切れるを恐れて片肌を脱げど、他人のためには死んでも兩肌を脱がず、喧嘩口論も、靜に損得を考へた上の事、裏店の貧乏人も神妙に宵越しの錢を溜め込んで、いざといふ場合も容易に巾著の紐を弛めず、いち／＼手に取りて目方を量らざれば五厘一錢の饅頭も買はず、宴會の歸りには、必ず汁吸ひ折提げを實行し、相談の席上には、必ず割前勘定を前にし、あれで煙になる莖を吸ふが不思議なりとは、江戸ッ兒の大願成就を、只これ縮の刺身にありといふが如く、あまり

に上方贅六を、見くびり過ぎたる酷評なり、
 京都の愛宕山に上りて、日の出の景色を見渡す心地は得もいはれざれど、晴天に遠雷の響きを聴くが如く、ぞろ／＼と妙な音するは、市中一體に朝の茶粥を啜るがためなりといへり、まさか京都の人間は、悉く茶粥腹を以て生命を繋げるにあらざるも、いはゆる京の著倒れと稱して、衣服の美を誇れる割合に食物は頗る劣れり、
 されど食物の名義のみは流石に古き都の風流を止めて優しく、その一例を挙げれば、料理屋以外、日常の煮物に酒鹽と味淋と鰹節とを用ゐず、譬へば大根の切干を乾雑魚に煮詰めて、これを軒忍ぶにや／＼と／＼といふ、や／＼は幼穉の意味にしてと／＼は魚の最も細小なるもの、また鯛をお室の御所と唱へ、古臭き糟味噌の澤庵漬を御香の宮と稱するが如き類、何ぞ其れ名稱の古風にして優美典雅なるや、いづれも食物の實を食はずして名を食ふもの多

く、加之も利益の點には名よりも實を取るもの多し、
 蓋し京都の名物は、古色蒼然たる神社佛閣と函庭的の山紫水明と松茸と醋莖と蕪の千枚漬と鮎と鯉と清水焼と友禪染の類なり、古くより第一に擧げらるゝ美人も實は所謂極彩色の人形美にして生きたる自然美の佳人は案外に尠し、
 高瀬の水は流れても疎水工事の結果、鴨川の水は涸れて河原に集ふ夕涼みの名所は塵埃捨場に等しく、寝たる姿の東山は依然たるも、祇園の春に一笑を購ふ萬金の客なく、圓山に雪見酒の風流を失ひ、島原の秋に出口の柳を顧みる華奢全盛の影を見ず、先斗町は徒らに宮川町と争ひ、京極の雑踏は絶えざるも木屋町の寢覺に川千鳥の聲を聴く人なし、嵯峨やお室の花は空しく歌詠に止まり、嵐山の渡月橋下に舟を浮べて往事を語るもの幾人かあるいはゆる自慢の京四季は、只これ三味線の絲に残りて、今日なほ日本一と稱せらるゝもの

は、夏の蟬と冬の底冷と坊主の多きと精進料理ばかりなり、
 同じ上方と稱せられながら、京都の人間は大阪の人間を萬事に下司根性の慌て者として、
 お座敷へ上げられまへん代物どすと笑ひ、また大阪の人間は京都の人間を古御所の雛人形
 として、食ふものも食はずに澄まし込んでけつかるかと笑ふ、つまり京の著倒れに對して大
 阪の食ひ倒れを絶えず喧嘩の基とせり、
 或人これを當らず觸らずに仲裁して曰く、東京は國家發展の政治舞臺、京都は功成り名遂
 げし風流の隠居所、大阪は經濟界の根本たる商業地、三都おの／＼お互に仲よく手を握り
 合ふて長短相補ひ相助くべしと、

幫間

幫間、俗にいふ太鼓持なり、

富貴に媚び權勢に諂うて、お髯の塵を拂ひ、襟元に纏ひ付き、脚下に這ひ廻り、その鼻息
 を親ひ眼色を見て取り、いかなる場合も御無理御尤と申し上げ、べこべこ常に頭を下げて
 額越しに、御機嫌を損ぜざるのみならず、御意とあれば、火水の中に飛び込ますとも、仰
 せに従ひ、満坐の中で、鯨銚立ぐらゐは平氣に勤め得るもの、これを幫間と稱し太鼓持と
 いふ、この幫間を以て、花柳の巷に生活せる男藝人とのみ思へるは、あまりの單純に過ぎ
 て、いまだ今日の世間を知らざる好人物なり、この太鼓持を以て遊治郎の御祝儀を戴き酒
 色の席上に滑稽を演ずるものとのみ思へるは、あまりの馬鹿正直に過ぎて、いまだ今日の
 社會を解せざる皮相の近眼者なり、

知らずや、軍人にも幫間あり、官吏にも太鼓持あり、學者にも幫間あり、名士にも太鼓持

あり、實業家にも幫間あり、政治家にも太鼓持あり、工場内に於ける職工中にも物質外に於ける文士中にも、この幫間と太鼓持のあらざるところなく、厳しき髭面と立派なる勳位と堂々たる議論と潔白なる説明と神聖なる天職と高尚なる理想とは、ふしぎなる哉、この幫間と太鼓持に頗る調和し易き世の中にして、これと衝突し矛盾するが如き窮窟なる今日の社會と思へるは、それこそ時勢を知らざる不融通の野暮漢にして、とんでもない大間違ひなり、

かゝる大間違ひの不料簡を以て世に處し事に當るものの哀れさよ、いかなる場所にも罷り出で、太鼓持をせざるがため、いつも縁の下への力持にせられて、その力の盡きし時は忽ち引き摺り出されて踏み殺さる、長いものには巻かれ立寄れば大樹の下、何ぞ我を學びて骨を折らずに天晴れの出世せざるやとは、この幫間學を以て世に時めきし阿爺の我子に對せ

し教訓なり、

この幫間學この阿爺の我子に對する内々の教訓に止まらず、動もすれば滔々たる世の中の
大勢と防ぎ難き人心の傾向、不言不語の間に社會の大教訓たらむとするの恐れあり、
おベツか學、ごますり學、べこく學、いづれの教科書にも見えざれど、今日の社會、い
たるところに現在の實例を示せる人物教育は頗る盛にして、その生徒たる幫間學の奇才秀
才また妙からず、曲學阿世の如き文字は既に過ぎ去りし時代後れの幼稚なるもの、巧言令
色の解釋と説明は最も遺憾なく實際に盡せり、
ある皮肉家、學校生徒の體操を見て曰く、一列一體に首を曲げ、腰を折り、膝を屈するは
何のためぞ、海鼠の如く、骨なし人間を作りて、他日、お辭儀の名人たる稽古にあらずや
と、

對 照

コントラストの意味、これを高尚なる形而上に求むれば、殆ど擧げて數ふるに際限なしといへども、まづ世間の耳目に最も觸れ易くして、また最も手近に面白き對照中、その一端一例を見れば、

○老いて用に立たざる自然の老朽と、若くして隱居めいたる不自然の若朽と、今日の社會いづれか多きや、

○小役人の位階を旅の宿帳に特筆大書せると、文士、小説家の雅號を旅の宿帳に墨痕淋漓たると、いづれか滑稽なるや、

○電車の車掌を捉へて無用の喧嘩腰に入らざる議論する男と、汽車中に四邊かまはず聲を

發して新聞を朗讀する男と、いづれか稗氣の多きや、

○あらゆる運動の結果に家産を傾けて、漸く罷り出でたる代議士の選良なるもの、如才なき官海の游泳術を以て僅に漕ぎ付けたる知事の良二千石なるものと、その地方に於ける信用の程度、いづれか多きや、

○初對面の席上、かきならせし火鉢の灰の中へ、無遠慮に痰を吐く客と、これを見るや否その額を二本の指頭に突きあげし主人と、いづれか無禮なるや、

○十三四歳の小僧が懷手に卷煙を咬へて煙を吐くと、十四五の小娘が吾妻コートの肩揚したるを引すり歩くと、いづれか生意氣なるや、

○金を貸すと金を借ると、いづれか心配多きや、

○犬を愛する女と、猫を愛する女と、雙方いづれを取るべきや、

○用なき洋書を常に放さず小脇に抱へて歩く男と、闇にも輝く眼球へ金縁の眼鏡をかけて歩く男と、いづれか氣取れるや、

○陶器の表札に、隸書の大字を以て姓名を現はせると、質金の二枚折を、玄關の片隅へ建てかけたるとやうく手に入れし虎の皮たゞ一枚を床の前に敷き込んで、客にも坐らす自己も坐らざる男と、あやしき水晶の玉を、友禪の座蒲團に上せて床に飾りたると、人目の惹き易きところへ、實のない到来の菓子折を積み重ねたると、急ごしらへの中庭へ仕入の金燈籠を吊したると、床柱欄間違棚、その他の諸所へ正體の得しれぬ屈曲木を濫用せると、角の帳場へ預けて置いても用の足るべきに、殊更ら狭き入口へ自用車の桿棒を突き出せると、常に門外より見ゆる二階の手摺へ、日の照らぬ時も絹夜具を乾したると、以上いづれか俗悪なるや、

○肱鐵砲をみごとに喰ひし歌妓を自己が獨占の情歸ぢや情婦ぢやと吹聴して自慢たらしくに觸れ歩く男と、四苦八苦に高利の金を以て購うたる書畫骨董を或貴顯よりの贈り物と稱して、得々たる男と、いづれか笑止千萬なるや、

○十年間、連れ添ふ我妻に弱點を知られざる男と、三年間、つけ覗ふ門外の敵に乗すべき隙を與へざる男と、いづれか手腕の多きや、

○たま／＼の休日に、割前勘定を以て鮎詰めの如く乗り込んたる自働車の客と、急傭ひの辻俵に埋もれて、歩調そろはぬ綱曳に誇ると、いづれか面白きや、

○すかぬ女に、泣いて口説かると、無用の客に、長坐せらるゝと、義理に聽かざるゝ素人淨瑠璃と飲めぬ口に、下等の悪酒を強ひらるゝと、心の見え透いた世辭愛嬌をいはると、いそがしき場合に、過ぎ去りし手柄談話を自慢せらるゝと、肺病患者の手料理を

振舞はるゝと、へつぽこ藝人に絶えず出入せらるゝと、以上いづれか有難迷惑の多きや、

○いはゆる今日の詩人歌人また文士などの腦味噌より絞り出せる詩歌文章と、田舎出の權助おさんが用事の片手間に唸る無心の鼻唄と、いづれに價値ありや、

○露現するとせざるに關せず、賄賂を贈るものと、賄賂を取るものと、いづれか智慧ありや、

○政黨政派に奔走するものと、政黨政派に奔走せざるものと、憂國慨世の點に於て、眞實の涙いづれに多きや、

○一擱萬金の相場師と、日夜鼠算の高利貸と、最後の打算上、いづれに利益多きや、
○身は貧にして、心の卑しからざるものと、心は卑しくして、身の富めるものと、人生いづれに幸福ありや、

づれに幸福ありや、

○世に強ねて衆に同化せざるものと、世を迎へて衆に同化するものと、人生いづれに眞理ありや、

○口やかましく罵り騒ぐ女と、ものもいはずに面を膨らす女と、不貞腐ツて寢込む女と、正體もなく聲を張り上げて泣き喚く女と、知りながら、知らぬ顔して冷笑半分に怨恨を返す女と、忽ち親類縁者へ耻け付けて、不平を訴へ廻る女と、そこらの器物に當り散らして、無言の喧嘩腰になる女と、頻りに涙ぐんで鬱ぎ込む女と、およを何事か、心に覺えある男の身として、以上いづれを取るべきや、

○心に憤怒を含む時、忽ち眉を上げ眼を怒らし面を突き出して膝を乗り出す男と、みるみる満面に朱を注いで眼ばかり白くする男と、猿の如く齒を剥き出して鼻に小皺を寄せる

男と、身を反し兩腕を組んで頻りに口を尖らす男と、額に青筋を立てながら平生の多辯を俄に黙して啞の如くなる男と、わざ／＼殊更に言葉を改め容姿を更めて初對面の如き慇懃の體を粧ふ男と、そら恍けて平氣に笑ひながら怨恨の眼元じろ／＼敵を睨む男と、もし間違へば以上いづれが最も物騒なりや、

○心に喜悅ある時、顔を襟に差入れて自己ひとりた／＼笑ふ男と、面の雜作を一時に崩して其まゝ雀躍する男と、げら／＼方圖もなく大聲あげて笑ふ男と、わざ／＼満面の喜悅を隠して殊更に眞面目なる男と、おのが鼻の頭を小指に抑へて頻りに首肯く男と、無闇に額を叩いて天井の節穴に感謝するが如き男と、そは／＼用もなきに起つたり居たりして物に躓く男と、あまりの嬉しさに身の置き所なく平生無沙汰の知己朋友を訪ひ歩く男と、以上いづれも小心者の習慣ながら、皆いづれが最も正直なるや、

○片山里に育ちし用舎娘の婚禮姿と、選舉騒ぎに新調したる百姓の洋服姿と、職人の小袖を重ねて立出でたる羽織姿と、籠の鳥の脱け出でたるが如き小僧の正月と盆とに於ける晴著と、以上いづれを最も愛すべきや、

○第一流を以て自任せる政治家が議場の演壇に立往生せる顔と、名聲噴々たる辯護士が法廷に行き詰りし顔と、評判よき女義太夫の高座で絶句せし顔と、べら／＼饒舌る落語家の借金取に責められたる顔と、學者の講義中に物忘れせし顔と、十七八の色娘が小石に躓いて倒れながらベタリと大地へ坐り直して、人や見ると四邊きよろ／＼見廻す顔と、急用かゝへて馳せ付けし間一髪に乗り後れて汽車の煤煙を見送る顔と、馬鹿の褒められたる顔と、下女の叱られたる顔と、以上いづれが最も罪なきや、

○づう／＼しく八方に飛び廻つて面の皮千枚張と稱せらるゝ男の俄に打濁れたると、死際

- の近き老爺が昔を夢みて俄に若返りたると、いづれが衰れなるや、
- 破竹の勢ひを以て、敵を倒せし全勝力士を最肩に連れ歩く男と、初日より負け続けし力士の、殊勝にも虚病を構へず、十日目まで負け通したる心根を愛する男と、雙方いづれか最も人生の頼み甲斐ありや、
- いはゆる策士と稱して、常に自己の手腕を吹聴しながら、實は多年の間さらに何事も爲し得ざる男と、いはゆる世話好きと稱して、日夜の間斷なく四方八方に飛び廻りながら未だ會て一事も奔走の功なき男と、いづれか最も馬鹿げて氣の毒なるや、
- 偏盲と瞽と我身に取り人に對して、いづれの不具を忍び易きや、
- 政黨の陣笠になりて家を潰せしものと、一代の放蕩兒になりて産を傾けしものと。いづれか人間の快事なるや、

- 名家の胤に生れて女郎屋の主人たると、學者の子にして賭博打の親分たると、いづれか生活上の意味ありや、
- 下手な畫工の末路と、下手な彫刻師の末路と、下手な小説家の末路と、同じ衣食に窮せし悲惨の中にも、どれが一番に哀れなるや、
- 美人を妻にする醜男と、美男を良人にする醜女と、夫婦の對照上、いづれが見よきや、
- 食ふものは食はずに溜めた金を一時の慾に欺されて取られる奴と、質を置いて元金以上の利を運びし後に流す奴と、さんざ世話になつた恩人を悪く言ひ觸らす奴と、自己の職業に絶えず不半を鳴らしながら噛り付いて動かぬ奴と、入らざる喧嘩に力み返つた後で謝罪證文を出す奴と、なるべく働かず収入の多い口を新聞の三行廣告に求める奴と、無一文の懐手しながら店頭ガラス越しに金銀寶石類の美術品を覗き込む奴と、大道の

賣卜者に掌を差出す奴と、口を開いて縁日の金齒を入れる奴と、苦學生の淫賣婦に戯ると、女學生の私生児を生むと、以上いづれか馬鹿さ加減の程度に於て最も深きや、

相場師

人間の貧富成敗は生涯の事業なれど、その生涯の貧富成敗を手鞠の如く顛がして日々の運次第に繰り返すがため一擲萬金といへば、世間普通の考へより直に相場師を聯想し、本人の相場師また常に絶えず實際これを規うて、殆ど狂氣の如き血眼を呈せり、されど人間の生涯を通じて打算せる運命を絶えず日々の時々刻々に争ひ、眼前の利那に一擲萬金を恣にすべき相場師より未だ曾て天下の富豪を出さざるものはそもく何のためぞいかにも不思議ならずや、

これを最も簡單なる平易の一言にして盡せば、盥の水を左右に傾くるが如し、さらに其勝敗を一種の批評眼に見れば、遺憾なく人生の哀れなる悲惨を示して、鶏の肉を切賣せる俎の下に、やがて自己の身を割かるゝとも知らず、互に餌を争ふ鶏の如し、まして斯道に生活せる本業の相場師ならず、つまり客と稱するものゝ外より來りて、たまたま萬人中の一人に所謂る成金を生ずる事あるも、その成金以外これを規ふがために家を破り身を亡ぼし妻子離散の悲境に陥るもの幾何ありや、加之も今日の成金は明日の成金にあらず、我こゝに彼を仆せば彼また我を仆して、苟も身を相場界に置く間は盲目の闇仕合と一般、互に傷つき互に息づいて、おのれ獨りに専有すべき眞の成功なるものなし、相場の中に芽を吹いて生れたる本業の相場師さへ、その成功は相場のための成功にあらず已むを得ざる事情の下に業を轉するか、一步も叶はざる重き疾病に臥すか、意外の天災に

逢うて、不具者となるか、もはや老衰の極に餘儀なく身を退くか、いづれにせよ、再び相場界に立歸り得ざるの時、幸ひ金を掴みしもの、是れ即ち相場師の成功にして、その他に相場師の成功なるものはなし、

たゞ相場師は相場界にありて衣食せりといふのみ、比較的、他よりも贅澤なる衣食せりといふのみ、

されど其贅澤また肱を枕に鼻唄を唄ふが如き安樂にあらず、あけても暮れても生命を縮めるほどの苦心慘憺より差引けば、寧ろ却つて割の悪き家業なり、

加之も一錢二錢を争ふ家業に千萬圓の身代あれど、絶えず日々の眠前に一掴萬金の頭がる相場師として、恐らく實際に五百萬圓以上の身代を起せしものなし、

つまり相場師は大木に生ぜる蟲の如し、其蟲は其木を食ひて生活し、四方より來れる客なるものは其木の肥料となりて其蟲の餌を作るが如し、

さらに相場は一種不治の病的にして、一度これに關すれば勝つて愈々止められず負けて猶更ら止められず、淫婦の墮落せると一般、額に穴があいて鼻でも缺けずば、迎も生涯その足を泥水より洗ひ難し、

株式取引所、米穀取引所、その両面に對して寸隙もなく軒を並べし多數の仲買人、これに關して出入せる無數の店員、その間に蠢動せる幾多の潜り屋と鶺吞屋、またこれを巢にして内外に飛び廻り跳ね廻る縦横無盡の怪物、火事場盜賊に等しき雲霞の群集、以上これを

國家の干城とすれば幾師團あるやも知れざる人間が、利慾の戰場に間斷なく日々の勝負を争うて、一切その兵站部を嫌ともいはずに快く引受けしものはいはゆる大慾の無慾に似たる客なり、

罵倒録―相場師

蓋し兜町と蠅殻町とは底のない大埧場にして、いかなる家庫も田地も山林も一朝こゝに投ずれば、忽ち溶解して影も形も残らず、凡そ財産を蕩盡するには、最も手短に最も簡単に最も埒の明く早道なり、

手を伸ばして雲を掴むが如きは昔の相場師にして、今日の相場師は社會の進歩と共に天下の大勢より經濟界の奈何に重きを置き、賣買の神算鬼謀また徒らに場面の老功を以て足れりとせず、殆ど一種の緻密なる科學的に講究せられたり、加之も米の高低は一國の元氣に關し株の盛衰は外交の根柢にまで波及せりとは、今日に於ける相場師の講釋なり、盜賊には盜賊の申譯あり、只この申譯の盜賊以外に通用せざるのみ、講釋いかに立派なるも、相場師は相場師にして、取引所は殆ど公開の賭博場なり、この賭博場に向うて、警視廳は絶えず飯の上の蠅を逐ふが如き藝を行ひ、農商務省は常に

角を矯めて牛を殺すが如き藝を行ふ、經濟の元動力は兜町に發し、米穀の集散力は蠅殻町に生ずるものとして、全然その存在を非認すべからざる理由ありとするも、今日の現場に於ける米と株とは、今日の警視廳と農商務省との役人に、迎も改善の力なく、取引所を賭博場たらしめざるだけの手腕なく、ただ公娼と私娼とを取締るぐらゐの程度なり、相場師そつと内々に笑うて曰く、月給取に相場師の事が分るものかと、

仕事師

土工を助け建築を扶けて立働くものを、世間の普通一般に仕事師といへど、こゝにいふ仕事師は悪辣なる意味に於て凄腕と稱せられ手腕家と稱せらるゝ社會的の仕事師なり、

罵倒録—仕事師

この仕事師の種類は頗る多方面なれど、つまり一口に働き手と稱せらるゝもの、必ず幾分の策士風を帯びて、實は眞面目なる一定の本職に従事するもの尠く、十中の八九、動もすれば空拳を以て何等か一大事業を起さむとするものなり、
霸氣満々、野心満々、常に謀反氣を以て四方八方を覘ひ、あはよくば濡れ手で粟の掴み取りを本領とし、やらすぶツたくり主義、ごまかし主義、乗るか反るかか捨鉢主義、顧んでも無手では起きぬ主義、苦しい時は一時遁辭の主義、叶はねば後足で砂を蹴飛ばす主義、進退こゝに合れば地獄の釜の上を一足飛びの主義、以上まづ斯る主義を以て社會に奔走し人生に勇躍するものこれを今日の仕事師といふ、
普請の足場を掛け建築の骨組をするが如き、正直なる仕事師の進歩せるものと思ふべからず、寧ろ他人の足場を搦ひ骨組を叩き潰し、うかくすれば生膽を三盃酸にして、べろり

と呑み兼ねまじき仕事師なり、

政黨の熱狂に壯士の湧いて出るが如く、事業の勃興には必ず此仕事師を伴ふ、壯士の必要なる政黨に何等かの闇黒面を擁すると一般、仕事師の跳梁する事業界に缺陷と醜聞のあらざるところなく、いはゆる會社荒しなるものはその惡辣なる手段を憎むべきと共に、乗じて以て荒さるゝ會社の多き意味なり、

いかに平靜なるが如きも、いかに完全なるが如きも、仕事師の仕事なき時その仕事を探し廻れば、今日の事業界は殆ど我等を歓迎するが如く、いたるところ叩いて塵埃の出でざる筈なく、いまだ會て仕事の不自由なしといへり、

元來この仕事師は、すべき事をする仕事師にあらずして、すべからざる事をする仕事師なれど、すべからざる事をする仕事師に乗ぜられ附け込まれ捻ぢ込まれて、これを一言の下

に跳ね飛ばす事も出来ず、これを一喝の下に縛り上げて突き出す事も出来ず、臭いものに蓋も仕きれずして、まんまと首尾よく仕事をせらるゝ所以は、その所以あるがためなり、今日の銀行諸會社の類にして、金網を張れる外面より窺ふも、聲を潜めて評議せる重役室の裏面より窺ふも、苦しからず疚しからず内外ともに一致して表裏ともに整然たるもの、凡そ幾何ありや、

當分まづ仕事師なるものゝ飢餓に迫るべき憂なく、自用車の上に悠々と反り返りて、いたるところ玄關拂ひを喰はざる世の中なり、

華族

華族を皇室の藩屏なりといふは、上御一人の稜威を汚し奉らざらむがための藩屏にして、

彼等の眼より見下したる平民どもに、威張り散らさむがための華族にあらず、されど今日の華族なるもの、動もすれば皇室の藩屏たる意味を取違ひ、陛下の赤子たる平民を有難き大御心より遠ざけて遮断せむとするが如き藩屏を築けり、藩屏の下、さらに一大溝渠を穿てり、

巍々たる邸宅の宏壯、酒々たる別荘の風月、出入の馬車と自動車をも以て、既に遺憾なく彼等は華族たるの資格を備へたるものと結了せるか、

いはゆる公卿華族、いはゆる大名華族、いはゆる新華族、この公侯伯子男中、もし國家の功勞に酬いられしものとすれば、寧ろ新華族に華族の待遇を受くべき意味あり、加之も功勞の意味は其人の一代に止めて、財産の如く子々孫々に傳ふべき理由なし、

まして舊華族の今日は、遠き祖先の餘慶に暖衣飽食して、生れながら特殊の肩書を所有せ

るもの、猶更ら社會へ對する申譯は蝕みたる系圖一卷を以て立つべからず、其品位は國民の師表となり其行爲は四方の尊敬を拂はるべきに、品位行爲ともに寧ろ却つて唾棄すべきもの多し、

人間は自己の生活以外に、何等か社會の有効たらざるべからずといふ事は、彼等に取りて始ど無感覺の無意味なり、たとひ無意味に解せざるも、寢て居て贅澤の出来る境遇上、これを實行する場合なく必要なきに安んじて、たとひ善い月日の下に生れたるものとなれり昔の御前と殿様なるものは、たとひ馬鹿にせよ、下司馬鹿にあらずして上品馬鹿なり、されど今日の御前と殿様は、何事も御存じのない上品馬鹿にあらずして、うか／＼すれば待合の勘定をも平氣で踏み倒すほどの下司馬鹿なり、加之も一面また無事太平の御前といはれ殿様と稱せらるゝものは殆ど無爲無能のお飾り

人形にして、たゞ華族の家に生れ華族の家に死するがため其葬式と其墓の立派なるのみ、民百姓を蟲の如くに思ひし武家政治の全盛時代さへ、男に生れたると學を修めたと大名にならざりしとを以て、人間の三大幸福とせる儒者あり、

今日また家庭に我子を叱る時、大喝一聲、華族の養子にやるぞといへば、泣く兒も忽ち止んで、いかなる悪戯も其場に停止するの習慣を養へる洒落者あり、

たま／＼華族中に國家有用の材ありとも、それは當然なり、敢て珍とするに足らず、寧ろ華族に華族たらざるものゝ多きを怪しむべし、

また華族にしては珍らしく出來てる人と稱美せらるゝもの、もし華族の肩書を取れば、普通の常人に及ばざること遠く、十中の八九、いはゆる御前仕込の殿様藝にして、世間普通の常人もし華族たらしめば、一家一門の俊秀、玄關に這ひ廻る三太夫どもの眼よりは天晴

の名君たるべし、
華族にして自ら誇れるもの、多くは下情に通ずるの一語を以て得々たれど、彼等の下情は實際の世態人情にあらすして殆ど常識以外の劣情なり、うまく藝妓を欺して手柄顔なると一般、質屋の利息を知れるぐらゐの程度なり、加之も自己の財産は飼犬に食はれても御存知なし、

紳士

紳士とは外面より見たる境遇の贅澤と容貌風俗の立派なる意味にして、その他に何等の資格も入らず何等の理由も要せざるものなり、シルクハットに燕尾服の如きは、最も紳士たるの必需品にして、常に絶えず紋付の羽織袴

も亦これ紳士たるの體裁上に缺くべからず、別荘と妾宅あれば猶更ら以て紳士の貫目を添へ、有名なる料理屋と待合と藝妓に馴染の多きは、いよ／＼紳士の體面を備へ、たとひ苦しい借金するとも年に一度は必ず避暑に出掛け、たとひ身を切るほど嫌でも折々は慈善的の寄附金に應じ、なるべく人に對して悠々たる言語態度を示し、及ぶかぎり世間に向うて名聲噴々たる廣告術を用ひ、利益ありと思へば多少の病氣を押しても交際場裡へ推參し、もし損が行くと思へば親戚故舊たりとも遠慮なく玄關拂ひを喰はし、その他に於ける人事一切の總てを悉く手前勝手個人主義より割り出せば、凡そ今日の社會に紳士たるの試験法として落第すべき筈なし、
猿にも衣裳といへど、猿は人間に類せるもの、これに衣服體裁を飾れば、牛の骨と馬の骨とを著飾りて紳士然たるよりも、遙に勝れり、

まして車夫馬丁に等しきもの、その容貌風俗を立派にすれば、ますく以て遺憾なき紳士然たるべし、

その別荘が二重抵當となり、その妾宅に怪しい男が忍び込み、その洋服屋と呉服屋とに不義理の濟まざるが如きは、決して紳士たるの體面に拘はるべからず、満足に手紙も書けざるが如き新聞の論説を通讀し得ざるが如きは、これまた紳士の恥づべきところにあらずして、約束を間違へ責任を抛棄し義務を履行せざるが如きは、固より紳士の當然なる行爲といふべし、

人道を守りて徳義を重んじ理想を高くして向上せよとは、古今ともに難しとするところなれど、以上の如き注文を以て直に紳士たるは容易なる藝にして、皮一重の外面を飾るに汲々たる今日の社會、猫も杓子も朝飯前の仕事に紳士と化けるものゝ多き所以なり、

武士道は浪花節に鼓吹され、紳士道は斯る化物によりて奪ひ去らる、いかにも心細き世の中ならずや、

謀反氣

平の將門が破れし時、その死に臨みて猶いまだ改めず、これ朕が不徳なりと滅らす口を叩きしは、そも我國に於ける謀反氣の第一にして、和氣清麿に鼻柱を引ン捻ぢられし弓削道鏡の如きは、實際に國家を覘ひしか覘はざりしか、聊か疑問に置くべき謀反なり、されど國家の大事に關せずして朝廷以外に於ける武家武門の下、いはゆる君臣と稱し主従と稱せる間に君を弑し主を殺し家を奪はむとせし謀反人は、殆ど擧げて數ふべからず、あまり謀反人の澤山なると謀反人の混み合ひしたため、南北朝の時代、恐れ多くも後醍醐帝

を稱して天皇の御謀反とせる太平記あるに至れり、
 應仁以來、元龜より天正の間に於ける謀反人は、氣の毒にも明智光秀これを一人で背負は
 され、徳川氏三百年間の謀反人は、由非正雪と丸橋忠彌の二人、これを差荷ひに擔げり、
 さらに各藩おのゝ家騒動の小謀反は、まづ仙臺と黒田とを始めとして、名もなき小ツ
 旗本に至るまで、皆それゝ分相應にあらざるところなし、
 蓋し謀反氣は、時代に伴うて變遷し人情に従うて縮少し、今日の社會に於ける謀反人は多
 く政治方面に立籠れり、政黨の領袖は譬ひ三日大臣たりとも内閣の椅子を夢み、政派の
 陣笠連は直に叩き出されても一度は幹部の乗ツ取策を講じ、或は代議士を規ひ、市會議員
 を規ひ、縣會議員を規ひ、最も其お優しいところでは村會議員を規ひ、村長たるを以て大
 願成就の赤飯を配るに至れり、

昔は萬卒の屍を積んで大將また生命がげの謀反も、至極お手輕に安直の世となれる哉、
 ちよいと試みに謀反氣を起して、もし叶はねば忽ち首を縮め、また出直して悪ければ、ま
 た直に引ツ込む工合、世間は次第に廣く難しくなれど、人間の謀反は段々と狭く小さく吝
 臭くなれり、

相場師と山師の謀反氣は日夜さらに絶えずして、官吏も學者も實業家も宗教家も多少の謀
 反氣を持たざるものなく、妾が奥様の後釜を規ひ、藝妓が常に玉の輿を規ひ、青年男女に
 於ける戀の謀反は固より、生涯の思ひ出に下安の指環を規ふが如き哀れな謀反に至るまで
 謀反氣の下落はブリキの截屑にも劣れり、

今日の場合、謀反らしき謀反は舊演劇の舞臺と講釋師の張扇と淨瑠璃の文句と赤本の小説
 種に残れるのみ、現在の事實に於ては大道の立ン坊が一品洋食の店頭に歩を停めても、

天晴れ大望を抱きし謀反の内なり、

出 來 心

つい其場の出来心とは、全體、どういふ場合の出来心なりや、由来この出来心なるもの、出来た凡例なく、よし出来ても、ろくな事なく、言語道断、けしからん事のみ多し、沈黙考の末、苦心慘憺の極、なほ意の如くならずして間違ひ易き人生に、前後の考へもなく、只その場の出来心を以て首尾よく事を爲し遂げむとす、あまり蟲の善すぎる料簡ならずや、

十中の八九、つい其場の出来心とは出来損うた後か乃至また出来ても現れた後で、ぎゆう／＼いはされて謝る時の言葉に用ゐらる、つまり面目次第もなく何とも申譯か御坐いま

せんといふ意味なり、

但し申譯が御坐いませんで済む出来心は、その申譯を聞いて、怒すべき事もあれど、近來頻々と世間の實例に示さるゝ出来心は、謝つたぐらゐでは逆も済まぬこと多し、

されど人間ます／＼横着に馴れて、づう／＼しく面の皮の厚くなりし今日、昔の武士ならば腹を切つても済まぬ場合に、萬事この出来心を以て申開きの相立つものと心得、穴でもあれば這入るべきほどの恥辱を平氣に構へて、つい一時の出来心と済まし込み、その甚だしい奴は、考へて仕た事でもないと空を嘯き、もう出来た事は仕方がないと相手に逆捻を喰はしてまた直に其場の出来心を發揮せむとするものあり、

またこの出来心に、アルコールを加へて、つい酒の上の出来心とか、酔うて何事も知らなんだとかいふ奴には、油斷大敵、案外その本性は違はず、始めより恥辱も外聞も豫防しな

から、頗る大膽なる行爲に取掛る奴あり、
 姦通、竊盜、持逃、萬引、詐偽、横領、かゝる人道を外れし法律上の罪惡さへ、動もすれ
 ば一時の出來心を以て免れむとし、たとひ免れざるも、幾分か情狀酌量の割引を蒙らむ
 とする太い奴あり、
 一時の出來心を一時たゞ良心の麻痺せるものと見るは、いかにも君子的の雅量に似たれど
 萬事に高を括つて悪い事をする奴の多い今日、この上また彼等のため斯の如き便利至極の
 都合よき解釋を與ふれば、つい其場の出來心黨は、いよく圖に乗りて何をするやら知る
 べからず、

つまり今日の所謂る出來心なるものは、ふと思はず我を忘れて其場の無意識に發する出來
 心と違ひ、どの場にも豫て充分に覺悟し承知しながら、加之も一時でなく繼續的に終始一
 貫して、ちよいと絶えず行ふもの多し、
 道理と人情とは次第に縮少し下落し衰退せる今日、この出來心のみは次第に膨脹し發達し
 進歩し來りて、人事一切、いづれも其場の都合と其場の出來心とに左右せられむとす、
 もしこの勢ひを以て進めば、天下の政治も國家の經濟も、悉く皆その場の御都合次第と、
 つい一時の出來心より割り出さるべし、

醫者

醫者が上手となりしにあらず、醫學の進歩と醫療器械の發達せしがためなり、醫學の進歩
 と醫療器械の發達せしにあらず、人口の繁殖に従ひ生存の競争に勞れて、人間ますます弱
 くなりし結果、試験的材料を供せし病人の殖えしがためなり、

魚類の不自由なき海岸は魚類の豊富と新鮮とに依頼して料理法の進まざるが如く、醫學も藥劑も器械も殆ど遺憾なく完備せる今日の醫者は、その手腕に於て寧ろ拙劣なり、その診察に於て寧ろ下手なり、

或程度まで醫學上に必要の書籍を読み器械の使用を學び藥劑の種類と調合を心得て、開業の免許を受け玄關を構へ自用車を置けば、既に名醫なり、たとひ實際は藪にせよ筒にせよ本人みづから稱して立派なる名醫なり、患者の如きは吸集するに何の雜作もなく、自己の病氣よりも第一まづ先生の世辭愛嬌と藥價の廉なるに雲集する今日の人情、一種の廣告術を以て忽ち門前に市をなすべし、

加之も今日の名醫中、動もすれば其病源を知れども其病人を知らざるもの多し、裏長屋の日傭取に向うても、朝夕のスープと鶏卵は固より、鯛の刺身を勧め舶來の葡萄酒

を強ひ、借屋住居の腰辨に向うても、海濱の出養生を説き山間の娛樂旅行を奨励するが如きは、つまり病人を治療するにあらず、寧ろ病人の煩悶憂苦を増して、精神的に殺すものなり、

昔の醫者が貧苦の病人に迎も及ばざる海外の朝鮮人蔘を強ふるよりも残酷にして、當時の貧民、その得られざるは諦め易けれど、今日の病人、たとひ日傭取にせよ腰辨にせよ、滋養物と出養生ぐらゐは諦め難し、諦め難くして實際に出來ざるがため、病症ますます重きを加ふ、また哀れならずや、

傷寒論一冊を以て醫學の金科玉條とせる頃、朝夕の食もなくして重き眼病に罹れるものあり、町醫者の一人その男の眼よりも足の裏を見て驚き、なアに汝の眼病は何でもない捨てて置いても自然に癒るが、この足の裏に大變な病が潜んで居る、うか／＼すれば生命を取

られるぞと首を傾けしに、その男たゞ足の裏ばかりに氣を取られて、逆上せし眼病は知らぬ間に平癒せりといふ逸話あり、今日の醫學上より論ずれば、殆ど馬鹿げて一場の滑稽談なれど、もし今日の進歩發達せる醫者に臨機應變この氣轉あらしめば、いはゆる鬼に鐵棒なり、

醫者の學理に偏して器械的に傾き過ぎしのみならず、近來の病人また病に憊むよりも自己の氣で病むもの頗る多し、

人として疾病を粗末にするは、我身を知らざる白癡の骨頂なれど、あまり疾病を恐れて蚤に食はれ蚊に螫されし事まで醫者騒ぎの種とするは、人間の身體を紙細工の如く心得たる狼狽者なり、

この氣で病む紙細工の狼狽者と、この氣の利かざる學理一方のお醫者さんと、兩方より互

に織るが如く往來の激しき今日、いたるところ病人の絶えざる筈にして、藥局の繁昌、患者の繁昌、賣藥屋の繁昌、これに神經過敏なる衛生家の講釋と注文をすく臆病風を吹かして、殆ど社會の半分は青白く瘦せたる顔と顔とを睨み合はせ、ひよろ／＼する身體と身體とを支へ合うたるが如し、

生來でない不具者の多きは、死すべきものを殺さざりし外科の效能を立證すれども、五體満足に揃うて藥瓶を提げ歩く人間の多きは、俄に慌てゝ内科の進歩に感謝すべからず、まして患者に對するよりも自己の營業繁昌に重きを置かるゝお醫者さんの増加するは、或意味に於て健康状態より無理に病人を製造する所以なり、實際また今日の人間は病人に製造され易く出來たり、

學者

論語讀みの論語知らずを以て、今日の學者を評するは、あまりに失禮すぎたる業なり、論語にも洒落れたことあり肱枕、これを以て今日の學者を評するも、また頗る御人品を害するの恐れあり、

さらに學者を世間に疎く人情に遠き飯食辭書とするは、何とも申譯のない侮辱の言なり、また學者を學問に中毒せる一種の精神病者に取扱ふは、最も不埒千萬にして罰の當る次第なり、

まして學者を机上の空論家とし疊の上の水練家として口先ばかりの講釋屋とし實務實行上の厄介物とするが如きは、言語道斷の極なり、

學者の高尚、學者の幽玄、學者の權威、學者の品位、その他あらゆる點に學者の尊きところは、學者その人にあらずして他の俗物どもより知れる筈なし、

あの先生あれであの學問さへなければ、よほど豪い人だらうといふが如きは、けしからん大間違ひなり、

どうも學問があるだけに、猶更ら世間しらすの強情で困るといふが如きは、いよ／＼以て相濟まざる言葉なり、

なアにあれば學者だよ、空威張りに威張らして置けば宜いさ、うか／＼相手になツちやア大變だぜと、互に相警めて敬遠策を施すが如きは、最も無禮の甚だしきものなり、

そツと當らず觸らず、すきな熱を吹かして置け、また其うち調べものでもさす時の役に立つよと、底のぬけた摺鉢を植木鉢にするが如き待遇を以て接するは、ます／＼不届至極な

り、考へて見ると罪がないねエ、お氣の毒なほど善人に出來てるよ、はゝゝゝと只これ一笑に附し去るが如きは、學者に對して最も罪の深い申し上げやうなり、どうせ學者のいふこつた、わけの分る筈がない、どうせ學者のするこつた、満足に出来る筈がない、どうせ學者だもの、本でも讀んで寝る外に藝があるものかといふに至つては、もはや學者を血の氣の通ふ人間の部に入れざる沙汰の限りといふべし、元來この學者といへる崇高の二字を以て、直に迂遠と解釋し、放漫と速了し、無爲無能と心得、また殆ど社會の食客に等しきものとせるが如きは、そもゝゝ學者の罪か學問の罪か乃至その徳を知らざる世間の罪なりや、さらに活學活書の文字ありて、いはゆる一般の學者なるものを死學とし死書とせるは、官

學と私學とを分つが如き簡單の意味にあらざるべく、そもゝゝその他に何等の必要ありて死活の相違を現はせしか、

されど一面また今日の學者に案外の世間學者あり通人學者あり、迂遠なるが如くにして意外の伶俐に立ち廻る手まめ足まめの奔走學者あり、神韻漂渺として思ひもよらぬ素股くゞりの素早い業をする學者あり、無慾淡泊の看板を懸けて、油斷のならぬ金儲け一點張の學者あり、高尚にして幽玄なるが如き下に實は執念深き婦女子よりも嫉妬偏執の甚だしき學者あり、高潔にして遠大なるが如き下に實は豚小屋よりも臭氣紛々たる學者あり、學者面の千三屋、學者面の高利貸、學者面の太鼓持、學者面の媒酌商賣、學者それ悉く世間より所謂學者扱ひにせらるゝ好人物のみならむや、

つまり學問の神聖と學問の權威とは、以上の二者によりて汚さるべきものにあらすと雖も

今日かゝる學者より無理に引ツ張り込まれむとするがため、殆ど落付いて宿るべきところなく、墮落せる現在の社會に道德の居り場處なくして中有に迷へるが如し、

埒

埒の字、音はレツにして、またラチと讀み、キシともカキとも、メグリとも、マハリとも訓じ、世俗一般にいふ埒は、埒を結ふと稱し、竹矢來を以て圍へる意味なり、埒といふもの、これより外へ出づべからずと標榜して人道の周圍を限れる繩張とすれば、その心に埒も圍ひも竹矢來もないため我まゝ勝手に四方へ飛び出して悪い事をする奴は頗る世間に多く、いはゆる不埒千萬な奴なり、埒といふもの、もし人間の自由を奪ひ飛躍を支へて奮闘の障礙物とすれば、この埒を破り

も得せず越える事も出來ずしてうろ／＼埒の中に狼狽へ、くる／＼埒の中を舞ひ歩き、まご／＼しながら、いつまでも埒の明かぬ奴また世間に頗る多し、

蓋し埒は利害と善惡との両面に用ゐられ、また其人によりて大小あり廣狹あり、さらに出來工合の疎密あり圍ひやうの寬嚴ありといふべし、

國家は埒の最も廣く大なるものなれど、あまり用心し過ぎて埒の中に居縮めば海外の事情に暗く、あまり開け過ぎて埒の外へ飛び出せば國防を忽にする恐れあり、雪隠は最も埒の狭く小なるものにして、これを開け放てば醜體を現はし、これに閉ぢ籠められては臭くて堪らず、人心の埒は宛も雪隠の如く、四方周圍へ不埒ならずして、何時たりとも自由自在に埒の戸の開くを最も處世の利便とすべし、

圃にも入らず到るところへ汚物を垂れ流す奴は、所謂る尻の始末も出來ず尻も結ばざる不

埒の極なり、また廁の戸を釘付の如くにして踏板を外し糞壺へ落ち込む奴、全然これは自業自得の雪隠攻めに何事も埒の開かざる極なり、

噂

噂の字はウハサと訓じモノガタリと訓ぜり、口の尊きか、尊き口か、いづれにせよ、噂の字をモノガタリとすれば、ウハサなるもの、人のために善を揚げ徳を稱し世のために益あるべき意味なれど、世間の實例は、この噂ほど大膽に嘘の多きものなく、噂ほど當にならざるものなく、噂ほど馬鹿げたるものなく、噂ほど根柢なく根柢なくして、あやふやの多きものなし、風聞の二字、またウハサと讀むの便あり、どうせ風の便りに聞いたこと信用は置けないよ

と、始めより謝りて物語れば却つて間違ひ紛かるべし、

さるを他人の噂にかぎりて、寧ろ本人の直談よりも確實なるが如く請合ひ、おのれ眼前に見て来たやうな事を保證して語るもの多く、また噂を聞くもの、これを風の便りとせず、宛ら仇敵の所在でも知れた如き勢ひに力瘤を入れ膝を乗り出して耳を傾け、面白半分に猶更ら輪をかけて他に傳ふれば、他より他に轉々して方圖なく際限なく、いはゆる針小棒大の結果を産み出すのみならず、甚だしきは全然これ無根の虚偽を吹聴し歩いて、途中に頭を拵へ尾が出来その間に角も生え牙も生えて雲を起し風を巻き、いはゆる灰吹より蛇の出る筈なり、

煙のあるところ必ず火ありといへど、比較的それは人間の正直なりし昔の噂なり、嘘を吐く事に妙を得たる今日の人間が、聞き間違ひの多い今日の社會に向うて觸れ廻る噂は、敢

て必ずしも火あるを要せず、マツチの火を擦ツて古新聞の三四枚も焼けば、忽ち黒煙濛々として天を焦すが如き噂となるべし、
 萬事この流を以て火を發し煙を揚ぐ、尻に似たる天下の大事と夢に似たる人生の珍事また絶えざる所以なり、これがために色を變じて驚く奴、それがために眼を刺いて騒ぎ出す奴これを擔ぎ廻り、これを觸れ歩き、さア大變大變と叫ぶ、寧ろ哀れならずや、
 加之も今日の噂は朝に起りて夕に消え、その生滅の早きこと猫の眼の變るが如し、何を標準に如何なる點より割り出せしか、人の噂を七十五日とせし昔に比すれば、いよいよ以て今日の噂に取り止めもなく根も葉もない證據たるべし、
 蓋し噂とは、上の空言といふ意味にあらざるか、
 上の空言は、熱に浮かされて病める時、我を忘れて夢中に唸り出すもの、いはゆるタハコトなり、

されど今日の世間、何を此奴、タハコトを吐すといふものなく、お互にタハコトを盡し合
 うて、タワイもない事に氣を揉み心を惱まし、喧嘩口論、反目敵視、誹謗讒誣、動もすれ
 ば放火殺人の大罪に至るまで、このタハコトより生じ、この噂より生ずること多し、
 一説に曰く、タハコトは戯れ言なりと、戯れ言は冗談なり、瓢箪から駒を出すよりも冗談
 から禍を出すは最も恐るべき危険にして、タハコトまたタハコトとして捨て置くべからず
 取るにも足らざる噂また取ツて以て大に考へざるべからず、
 噂に種々の程度あり大小あれど、世間普通、まづ多く噂の種を蒔くものは戀路の沙汰にあ
 り、ばツと立つ浮名の噂、どうも怪しいぜといふ噂、いかにも變だといふ噂、いよく出
 來たらしいぞといふが如き噂は、噂を立てられし本人に寧ろ嬉しがるものあれど、その戀

を破りて男女の交情を割くが如き噂は、それこそ噂より又物三昧の起ること多し、往來の雑踏に金を落して出る事ありとも、由來この噂の詮議して噂の本人いまだ出た事の凡例なきを幸ひ、加之も騒ぎの大きい割合に遁げ場の自由自在なるがため、卑怯にして犬の遠吠に似たる今日の人間に最も噂は適當の藝なり、

言行一致

言行一致を以て今日の人間に注文するは、豆腐屋に向うて石塔を注文するが如く、お門違ひも亦それ餘りに甚だしからずや、お門違ひによせ、その豆腐屋、もし飛びぬけて面白き男なれば、豆を潰す石臼あり石塔に叩き賣るやも知れざれど、今日の人間に、言行一致を強ふるが如きは、いかに強ひても責

めても、到底、出来ざる野暮の相談なり、

善悪を論ぜず、只その意志だけを發表せしめむとするも、前後を顛倒して満足に饒舌れぬもの多く、まして實地の上は猶更ら不具者の如く手も足も出せぬもの多く、言行おのゝ別にしてさへ一人前とならざる奴に向ひ、言行一致せよとは、せよといふものゝ無理なり間違ひなり、言行一致せざるを以て世間普通の一般に於ける今日の當然とす、

もし今日の當然以上を望まむとすれば死んでも出来ぬ事より、生きて萬一に出来得べき程度を考へ、寧ろ言行一致を廢して言心一致を要求すべし、

言心一致とは、心に思うた事を間違ひなく口に出すだけの藝にして、たゞ心と口さへ一致すれば可なり、これを實地に行ふと行はざるとは本人の勝手次第、敢て問ふところにあらず、

金を借りても始めより踏み倒すといふ太い料簡を起さず、これを返済せむと心に思ひ返済
 しますと口に誓へば、たとひ實際に返済は出来ざるも可なり、始めに欺す考へと欺す言葉
 さへなくば、後日の苦しきに預かりし物品を賣り飛ばしても可なり、その他いづれも
 萬事この筆法を以て始めの言心一致すれば、後の行爲に生ずる一切の無責任は、其場の成
 行次第に差支なしとするもの、言行一致の難きに比しては頗る容易ならずや、
 されど今日の社會、この容易なる言心一致もなほ難しとして出来ざるもの多く、行ひは固
 より口と心は殆ど正反對なり、
 踏み倒す氣で金を借り、賣り飛ばす氣で物品を預かり、欺す氣で約束を固め、遁げる氣で
 責任を負ひ、出さぬ氣で寄附金を承知し、助けぬ氣で慈善業を認諾し、男女ともに添はぬ
 氣で夫婦たるを誓ひ、知己朋友また何時でも絶交する氣で交るが如き類を擧ぐれば、なる

ほど容易なるべき言心一致も、今日の人情に於ては頗る難し、
 言行一致は殆ど不可能に歸し、言心一致また難しとすれば、口も心も行ひも別々の人間に
 して、つまり三人を一人に寄せたるが如く、いかにも立派に一個獨立の出来ざる筈なり、
 されど眉も眼も鼻も各々その位置を定めて、ちり／＼に四方へ飛びもせず離れもせず同一
 の顔面にあるは、これのみ不思議の至ならずや、

心機一轉

心機一轉、二轉三轉四轉五轉、くる／＼と時々刻々に心機が顛倒して、七顛八倒、これで
 は心機の定まる時なく、のべつ幕なしに轉々として休まる時なし、
 心機一轉とは、心靈の機軸こゝに一轉するといふが如き禪味を帯びたるものにあらず、い

はゆる君子の豹變にもあらず、また闇を去つて明に就くが如きものにあらず、その一轉は心機の顛倒する最初の一轉をいふものにして、いよく調子づけば一日の間に幾廻轉するやも知れざるもの、もし分り易くいへば、その日の風次第と天氣都合で氣心の變る事なり、腹が空いて蕎麥屋へ這入らうとした奴が、心機一轉して鮭屋へ飛び込み天ぶら屋へ駈け込み、淺草の活動寫眞を見て無事に歸る筈の奴、ふいと妙な工合に心機一轉して其まゝ魔界へ落ち込むが如き類なり、神聖の戀愛が心機一轉して忽ち路傍の人となり、多年の夫婦おのゝ心機一轉して家庭に波瀾を起し、浪人生活が苦しまぎれに一時の月給取となり、官吏が首を切られて餘儀なく商賣人となり、同志協力の約束が心機一轉のために散じて、めちやくゝとなるが如きは、今日に於ける心機一轉の聊か念入に考へた部なり、遠大なる理想上の心機一轉、幽玄なる信念上の心機一轉、權威ある主義主張の心機一轉、

人間生涯の出處進退に於ける心機一轉の如きものは、ふはくとして風船玉に等しき今日の心機一轉屋に望むべからず、

鴉の談話

櫻花爛漫の春陽、上野の森を我繩張とせる五六羽の鴉、その目立つを恐れて花に慙はず、わざと茂れる松の梢に翼を収めて頻りに下を見下しながら、すきな事を語り、

「やア出た出た、どうだい、この人出は」

「なるほど、出やアがツたなア」

「出る筈さ、花は満開、天氣は好し、おまけに今日は日曜と來てるからね」

「かうして見ると、人間といふ奴、得手勝手なもんだな、冬は火鉢に嚙り付いたりストー

「ヴの前に平張り付いたりして、上野のウの字も吐さないが、ちよいと時候が變れば、すぐこれだ」

「うよく、ぞろく、これが人浪といふんだらう、まッ黒で、男か女か分らないね、常に乃公なんかの事を、誰か鴉の雌雄を知らんやと吐すが、これちやア、人間の雌雄も御同様だ、さッばり知れないぜ」

「なアに人間の雌と雄は直ぐに知れるよ、あまり場所が高過ぎるからだ、今少し下枝へ降りて見ようぢやないか、きッと今日は面白いぜ、いろんな奴が來てるぜ、ついでに糞でも放ッかけてやらう」

「贊成賛成、何の手柄もない鶯や眼白のやうなものばかり大切に仕やアがッて、この國の開關に八咫鳥の關係あるのみか、昔から絶えず夜明を知らしてやる恩も義理も忘れて眼

の敵に石を抛げたり追ッたりする奴だ、かういふ時に糞を放ッかけてやれば、どこへ落しても外れッこなしだ」

「外れッこはないが、いくら放り出しても僅五六羽の糞だ、なるべく金のかッた澄まし込んだハイカラ美人に放ッかけてやらう、花見でなく實は人に見られたい料簡で今日を晴と著飾ッて來てるからね、猶更ら面白いよ」

「もし糞が足らなきやア、まねけた奴の腦天でも嘴で、嫌といふほど、ツツついてやらうか、頂門の一針と稱して、人間どもは寧ろ有難がるぜ」

「さアく文句は後だ、みんな降りた降りた、あの枝が宜からう、あまり遠からず近からず、加之も人間からは葉越しで、うまい工合に出來てるよ」

「や、いかにも、こりやア宜い枝だ、なるほど、こゝまで降りると人間の面が、はッきり

と見える、どいつも此奴も口を開いて、馬鹿な面を仕てるなア」

「おい、あれを見ろ、あゝいふ上品な立派な風俗をして萬事初心らしく見せてるが、ありやアあれで令嬢ぢやないぜ、きつと怪しいところに薄闇い巢を作ッてる化粧のもんだ、いくら上手に化けても第一あの歩きッぷりが承知しない、お里を現はしてるよ」

「お里を現はしてる奴が、此方にも居るぜ、そら直ぐ、この下を通るぢやアないか、男は新調の洋服で蚊の脛を引き伸ばしたやうな細いステッキ、女は頭の上をピカ／＼と光らしてイルミネーション的の廂髪、まづ二十六七と二十歳前後だね、あれで男女まだ新婚に間のない理想の夫婦といふ見えだらうが、實は金持の馬鹿息子が掘り出しでも仕た考へで、どツかの女給仕か女事務員を手に入れた嬉しさの餘り、一切の粧飾費用を受持ッて、これ見よがしに連れ歩くんだけ」

「おや、向の方に妙な形状をして踊ッてる奴がある、あれが人間仲間で浮かれるといふんだ、ぼつと春の陽気に逆上せて、氣が變になるんだね、花の中だから宜いが、もしあの調子が秋か冬に起ると狂氣になるのさ、人間ほど危険なものはないぜ」

「全くだ、危険といへば此方の酔ッばらひ、どうだえ、まるで正體がないね、あまり身分のある大した人間とも見えないが、分別盛の四十面さげて、白晝この混雑中を、あれだ定めし妻子もあるだらうに、よくまア恥かしくないこつた、そのくせ、あゝいふ奴に限ッて家へ歸ると案外、苦蟲を噛み潰したやうに、むづかしいもんだ、いち／＼下らない小言ばかり並べてね」

「なアに人間といふものは口でこそ生意氣な事をいふが、いち／＼さう正直に恥を知るもンぢやアないよ、今日これほどの群集雑踏で押し合ッてるが、この中で満足に一人前の

義理人情を心得てる奴は、幾人もないぜ、なるべく働かずに遊んで怠けながら出来るだけの贅澤したいといふ手前勝手競争だからね、お互に遠慮なく雙方より欺し合つて、うまく大きく欺しぬいた奴が成功者といふんだ、ぐづく面倒臭い恥や外聞を考へて居るもンかね、恩人の咽喉笛へ喰ひ付くぐらゐは朝飯前の仕事で濫皮の剥けた娘どころかもし買手がありやア親でも賣り飛ばして酒を飲む勢ひだ、反哺の孝は乃公なンの仲間だけだよ、此ごろの人間社會は殆ど孝行の種切れだ」

「や、さうかも知れないね、年に一度の花見で、これほど人出の多い中に、老父の手を引いたり老母の腰を劬勞ツて来る奴は、少しも目に當らない、手を引けば生若い男と女でいたくしく痛はるのは高利の金で無理に著飾ツた晴の衣裳ぐらゐだらう、もし人混が危いといへば、この中へ馬車や自動車や自働車を驅り込む奴があるぢやないか、ゆるく老人を

俥に乗せて來ても文句のない筈だ」

「時に一組、妙なのが通るぜ、かうして上から眞ツ直に見下せば鍋蓋の歩いてるやうな大束髪で、いやに白く塗り立てたハイカラ女の後から、ひよろ／＼した八字髻の瘦せツてけた洋服男が赤ン坊を抱いて行く工合、全體、ありやア何だらう、まさか貧乏華族の奥様が御氣に入りの家令を連れて歩く花見でもあるまいね」

「あれか、ありやア夫婦だ、あれこそ全くの夫婦だよ、當時あゝいふ夫婦が流行るんだ、ろくでもない面をした若い嬢アに田舎女優のやうな風をさしてね、乳呑兒を抱いた亭主野郎が温順しく神妙にお伴をするのさ、まだあれなにかア乳呑兒の外に蝙蝠傘や信玄袋を持たせられないだけ聊か助かつた部だ、かはいさうに、あの嬢アの帯と指環を拵へるため亭主野郎、尠くも凡そ半歳ぐらゐ苦しんでるぜ、あれで萬一、もし不足でもいへば

すぐに頭から吐り飛ばされるんだ」

「そりやア當然さ、いくら何だツて、半歳も苦しませて不足がいへるもんかね」

「おい〜間違ッてる、半歳も苦しんだのは亭主の方で、吐り飛ばすのは喉アの方だよ、子どもの一人や二人あらうがあるまいが一切お構ひなし、良人お嫌なら止ませうといふ勢ひで、すぐ猛烈に離婚を持ち出されるから、あけても暮れても亭主野郎、腫物に觸るやうな工合で、びく〜しながら御機嫌を取ツてる、ね、それが即ち最愛の妻といふんだ、わかツたか」

「わかツた、わかツた、しかし最愛の妻ばかりあツて、最愛の良人といふものは、ないのかね」

「それが今日の女で、理想といふものが高いからさ、一時、ちよいと間に合はせに、最愛の戀人はあツても、生涯これといふ最愛の良人は、當分まア拂底の様子だ」

「やア來た來た」

「何が來た」

「演劇の花道と間違ッて出たかと思ツたら、賣藥の廣告だ、ドン〜、ぶウ〜、樂隊入で行列旗を並べた大變な廣告屋だ、なるほど今日は新聞廣告よりも、サツと眼に見えて效能があるだらう」

「この人出だから廣告は眼に見えて利くだらうが、藥は其割合に利くまいよ」

「知れたことさ、賣藥が效能ほどに利いて堪るもんか、醫者が立たないより第一、賣藥屋が立たなくなるよ、人殺しの毒にさへならなきや、政府で許すもんだ、間斷なく毎日の新聞に出る高い廣告料も、いたるところ諸方に意匠を凝らした立派な金看板も、絶えず

市中を練り歩く大騒ぎの行列廣告も、その費用一切、すべて誰が出すと思つてる、薬は氣休めで、實は廣告を買つて飲むのさ、現在あの樂隊も旗も今日こゝへ集つてる奴が皆飲んで仕舞ふんだぜ、賣藥に限らず化粧品に限らず、人間萬事これ廣告の世の中だ、うまく上手に廣告さへすりやア馬鹿な奴も案外の出世が出来るし、つまらない野郎も世間に用ゐられるし、おまけに人間の廣告は嘘八百の組み合はせで、よほど怪しい賣藥よりも救能がない、なアに豪さうな面をして居ても、腹の底に何があるもんか、大抵は廣告人間だよ」

「さう考へて見ると、人間といふ奴、いづれも冷嘲馬鹿で、馬鹿の本地へ冷嘲の上塗をしたやうなものだな、やア上塗野郎が段々と増えて來やアがツた、そろ／＼生意氣な奴を見立て、糞でも放ツかけてやらうか」

「よからう、幸ひ眼下へ墮落した女學生の結果か淫賣か正體の分らないハイカラが一人、大めかして澄まし込んで立ツてるぜ、連れの男を見失つたか但し待ち合はしてるのか、事によると白粉面を曝して賣物にしてるのかも知れない、どう間違つても失禮になる氣遣ひのない女だ、かけてやれ」

「よし來た、どうだ、うまく肩口へかゝツたが本人さらに氣の付かないところを見ると、いよく此女、何か外へ心を取られてるんだな、面へかけてやりたくツても出張ツた廂髪が邪魔になるから、今度は襟首の中へ落し込んでやらう」

「待て待て、此方にも正體の分らない三十前後で、色の褪めた中折帽の前髻を深く下して古ぼけたインベネスの片袖を跳ねながら、頻りに其の煙を吹いて夜店のステッキを杖いたまゝ、暫く動かずに立ツてる奴がある、加之も前刻から嫌な眼付で、じろ／＼妙に女

の顔ばかり見てる工合、かういふ奴が覗つた女の後を躡けて、けしからん事に及ぶんだ
これが出齒龜といふんだらう、なるたけ濃いのを放ッかけてやれ」

「しかし少々、斜に間があり過ぎるよ、いくら尾を振ッても尻を振ッても、此まゝぢやア
無効だね」

「だからさ、無精をせず、ちよいと飛ンで放るのさ、外の奴へかけると氣の毒だから、
うまくやれよ、さうだ〜、うまい〜、首尾よく横面へかゝつた、はッと驚いて上を
睨んだ野郎の顔色、ハンケチで拭きながら急に歩き出したところは猶更ら妙だ」

「何だ〜、向の方が騒がしいぜ、は〜ア喧嘩だ、どうせ足を踏んだぐらゐのこツたらう
になかなか酷く遣ッてるやうだな、あゝなると實際どれが本人か分らないが、この人出
だもの、まして花見時の酒の勢ひで彌次馬が多いから堪らない」

「いよ〜人間の馬鹿さ加減を木地のまゝ現はして来たよ、かういふ人出の多い花の中で
喧嘩する奴に限ッて、性根の据らない浮腰野郎だから、さア立派に勝負をするといふ本
氣の喧嘩は逆も出来ないもんだ、つまり外面ばかり強がりの見え坊と見え坊が出合頭の
鉢合はせ、お互に見え坊の競べ合をして搦むやうなものさ、そこへ面白半分の彌次馬が
無代の演劇でも見るやうな調子で、わい〜四方から囃し立てるんだよ、大變な講釋と
理窟とを附けて喧しくいふ政黨の争ひとかも、やはり實際の根を洗へば、別に大して自
慢するほどの價値はない、この喧嘩と同じやうなものだぜ」

「どんな場合か知らないが、此ごろ人間は萬歳といふ事を三度づゝ唱へるさうだから、我
我も聲を揃へて三度啼いてやらうぢやないか」

「あほう、あほう、あほう」

鼠の會合

廂を傳ひ軒を傳ひ家根を傳ひ縁の下を傳ひ溝の中を傳うて、幸ひ一軒の空尾に集まりし數多の鼠くるりと、輪になりて、おの／＼持ち寄りし菓子、豆を嚙り飯粒を嚙り、ハイカラな奴はビスケットを嚙りチョコレートの破片を嚙りバナ、の皮を嚙りながら、喋々喃喃、もし他より聞けば、ちう／＼なるべし、

「おい、どうだい、近來の人間は嫌に吝臭く用心深くなつて來たから、お互に不自由で困るぢやアないか、さつぱり美味いものが手に入らない」

「なアに我々の方がかりでない、實は人間の方も生活難を來してゐるさうだからね」

「それのみぢやアない、馬鹿に衛生衛生と喧しく吐しやアがツて、をり／＼唐突に大掃除

をやられるには閉口する、うか／＼安心して子供な／＼か遊ばして置けないよ」

「おまけに、ベストを我々の原因だと吐して、むやみに殺し道具を置いたり毒を蒔き散らしたりするからね、危険で堪らない、猫だけの用心で濟んだ昔の方が、よほど氣樂で太平だツたね」

「しかし威張る人間は葬式の費用ばかり掛つて死んだ死骸は一文にもならないが、乃公な／＼かア直ぐに三錢とか五錢とか、中には闇に當つて大變な金になるぢやアないか」

「いくら金になつても、やはり人間が取るから無効だよ、かうなツちやア我々の方も自暴だ、寧ろ大膽に出かけて、勝手元は昔からの繩張だから無論の事、座敷でも茶の間でも大に荒して、手當り次第に嚙れるだけ嚙つてやるのさ、いつ何時どうなるか知れないにかししく速慮して居ちやア、つまらないぜ、人間といふ奴、わからないからね、捕捉へ

「た以上、おとなしいのも荒れたのも一列一體で、見境がないよ」

「そのくせ、人間め、福の神の大黒様を祭つたり晝に描いたりする時は、是非とも乃公なシカを袖に出来ないぢやアないか、まして白粉臭い女は、嬉しい時に絶えず乃公なシカの口眞似を仕やアがツてさ、同じ粗末に扱はれても、御殿場の床下で、うぬも只の鼠ぢやあシめエと足に踏まれた方が、いくら威勢よく面白いか知れない」

「ところが人の悪い奴、乃公なシカの死骸を繩にからげて交番所へ持つて行く時、こいつも無値の鼠でないと吐してるよ、癩に觸るね、畜生ツ」

「おツと、お互に禁句だ」

「時に君は今、どんな家に棲んでる」

「僕か、僕の家は實に面白いぜ、妾宅だ」

「妾宅、そりやア面白からう」

「たゞ一事面白くないのは、妾の女め、頻りに猫を大事に仕やアがツてね朝から晩まで、ニヤア〜と薄氣味が悪いよ、だが猫も貧乏長屋の稼ぎ猫と違ツて、生れ立から妾の膝の上で、贅澤に育ツてるからね、あまり乃公なシカの方を覘はないだけ、まア蒼蠅く鳴く割合に無事の方だ」

「そいつア仕方がない、妾宅に猫は附帶物だよ、その妾だツて、元の身に縁のない方ぢやアあるまい」

「無論さ、藝妓あがりの二十五六で、すつきりとした意氣な色白で、なか〜乙な女だぜをり〜婆アやに自慢するところを聞くと、襟を持つてる頃は全盛を極めたもんださうだ」

「親指は何だい」

「旦那といふのは或會社の重役で、六十の阪を越した赤面の禿頭、本宅には髭の生えたのを總領に八人も子どもがあるさうだ、おまけに孫が六人、それで殆ど二日置きの御尊來甚だしい時は一週間ぐらゐ缺かさず通つて來るぜ、どうだい、老朽老朽といふが、この道にかけては近來の老爺、實に元氣旺盛なもんだね、チュ、チュ、チュ（これは鼠の）加之も毎晩、忍び駒の爪弾で夜の一時二時まで酒だ、無論、朝は遅いからね、僕は曉方に稼いでやるのさ」

「その鹽梅ぢやア、まさか番菜ぢやアなからう、料理屋もんだらう、うまくやるね」

「まア、さうだな」

「ところで、お妾どの、神妙に禿頭を守つてるかね、旦那の留守に怪しい野郎が、こそこ

そ這入つて來やア仕ないかね」

「來るともさ、日曜と祭日の外ア會社で時間に縛られてる老爺だから、大手を振つた晝盜賊が盛に遣つて來るよ、年輩、三十前後の苦味走つた勇み肌の奴が一人、お約束通り兄とか従兄とかいふ名目でね、これだけが實際の情夫らしい」

「それだけ實際の情夫といへば、まだ外にも情夫に似たやうな奴があるのかね」

「あるね、新舊、どつちか見分の付かない馬の脚が一疋、活辯あがりか墮落書生の摺れたやうなのが一個、その他にも三四枚、いろんな薄ッぺらな奴が出這入りするよ、あの老爺の猛烈に恐れず、かういふ工合に引き摺り込む女だからね、まだ外へ出て何をするかどれほど發展するか知れたもンぢやアない」

「凄いなエ、それで且的、少しも御存じないのか」

「身體は勞れても、お氣の付かれる恐れなし、且ますく御満足の體で、かう仰せられるふしぎに藝妓なにかした女に似合はず初心なところがあつて、萬事また内氣に出来るよ、てな調子でね、すると妾の言草が有難い、わたしは生來、氣が弱くつて騒がしい事が嫌で御坐いますから、もし旦那様に救ひ上げて戴かないと、今頃は病人になつて居るかも知れませんか、吐すよ、また斯うして只、結構に遊んではかり居りまして、あまり勿體なう御坐いますから、冥加のため何か、世間體に見苦しくない手内職でも致しませうかと、この術で持ち掛けるんだもの、老爺、もう眼が見えないね、どんな深い穴へ突き落さうと引ツ張り込まうと自由自在だ」

「お妾は二世と三世の間のもの、二世の夫婦でもなく三世の主従でもなく、主従氣取が半分夫婦氣取が半分といふくらゐだから、まさか世間一帯、そんな女ばかりぢやアあるまいが、わけて其老爺は妾氣質の此上なしといふ手酷い女に出喰はしたのだ、根が自墮落だから却つて窮屈な本妻に居直る考へはないとして、本宅にある庫の一軒や二軒は、きツと掌上に揉み潰すだらうよ」

「時に貴公は今、どんな家に巢を構へてる」

「拙者か、拙者方は義太夫の師匠だ」

「そりやア陽氣で宜いね」

「陽氣も陽氣、あまり圖外れに陽氣すぎて困るよ、せめて若い女師匠なら義太夫よりも目的の外にありで、をりく閑靜になつたり違出する事もあるが、五十面の男師匠で内稽古の一點張だから、いやはや、立替り入り替り親不幸な聲や出世の害になる聲ばかり絞りに来る奴が多くツてね、やりきれないよ」

「なるほど、下手な義太夫は外の唄や三味線より悪當りに當りが強くツて、夏の眞盛り腐ツた鏝に酔ツたやうな氣持になるが、しかし段々と馴れて來りやア、それほどにもなからう」

「なアに義大夫を語る本人は夢中だからね、下手は下手なりに固まる時節もあるが、さて聞かされる方に馴れツこのないもんだ、全體まア人間といふ奴、なぜ、あゝ狂氣になるんだらう、狂氣も狂氣、病院へ入れるか檻へでも叩ツ込める狂氣なら、まだ始末は宜いが、義大夫狂氣に限ツて、素寒貧の其日稼ぎな奴はなし、おまけに一家の主人顔をしてゐる奴が多いからね、遠慮會釋なしに何處へでも四方八方、のこゝ飛び出して困るよ義大夫に付いて面白い實談がある、まづ大阪の文樂座といへば義大夫の本場だらう、その文樂で元の越路太夫が全盛時代だ、例の攝津大掾が出る番になると、すぐに坐を起ツ

て歸る奴がある、こりやア金持の隠居でね、自分だけは天晴れ日本一の名人と思ツて居るからそこを附け込む悪い奴が越路の出場になると、どうも旦那こゝで貴君に聞いて居られちやア流石の太夫も睨まれるやうな氣がして充分に語れないと申して居りますぜ、いふと隠居め、大きく首肯いて、や、尤だ、折角あれだけになツた藝人を困らせちやア氣の毒だと、祝儀を出して其まゝ歸る隠居があツたさうだ、加之も文樂の開いてる間は毎日これを遣りに來たといふこツた、どうだい、恐ろしからう、義大夫の狂氣は、こゝまで逆上するもんだ、また東京の或紳士で、義大夫自慢の男が大阪へ行く汽車中、一等室で四邊の迷惑も構はず盛に唸り出した、すると隅の方に小さく後ろ向になツて顔を隠しながら、くつ／＼と思はず笑ツた奴がある、怒るまい事か紳士、實は聊か酒の氣もあツたからね、おい貴様、なぜ乃公の義大夫を笑うた、どこが呵しい、全體、貴様ア何物だ

と吐鳴ツた、吐鳴られた奴、ますく首を縮めてね、へエ私は越路で御坐います、つまり三代目、今の越路だツた、これを聞いた紳士、どしんと背中を叩いて、ふざけた奴ぢやアないか、越路なら越路と、何故ここへ這入ツた時に最初、さういはない、黙ツてるとは失敬な奴だ、以後は氣を付けろと、大笑ひしたさうだが、前の隠居に比べて少しは正氣があるらしいね、しかし狂氣は狂氣だ」

「義太夫狂氣にも困るだらうが、乃公の方は賭博狂氣の寄合で四季不斷の春とでもいふんだらう、年が年中お花見ばかり仕てるよ、表構へは植込みの奥深い別荘と見せかけてね第一に客種が驚くよ、會社の取締とか監査役とか銀行の誰とか彼とか、その他いづれも世間へ名の通ツた奴ばかりで、ちよいと始めて聞いたものは迎も眞實にしない、まさかあの人がいふやうな、とんでもないのが遣ツて來るぜ、加之も世間ぢやア清廉潔白の

引受所で、聖人君子を食客に置いてるやうな立派な面をして居るが、どうして、どうして錦の裏の襪襪根性、いざ勝負の眞ツ最中、とれば利慾の熊鷹眼が血走ツて、鷲掴みの手の先から火が出る勢ひ、平生の友達も懇親もあツたもンぢやアない、あれで手近に刃物でもありやア一夜に二人や三人、きツと怪俄人が出来るね」

「しかし、そりやア全體誰の別荘だよ」

「表向の名前人はあるが實際、誰といふ所有者なしだ、うまく出來てるよ、すべて秘密結社の會社組織でね、來る毎に一人前、幾何づゝかの席料を出す、その席料が雜用にもなり金利にもなり元金へも這入ツて、最終には無代の共同物になるんださうだ、無論、留守番は老人夫婦で六十ぐらゐの老爺と五三四の婆つまり飼殺しさ、どうせ金と手に不自由のない奴等だから、いくら厳しくツても大丈夫、不意に踏み込まれる恐怖はなし、

煌々とした電燈の下で大びらに安心して賭場を開いてるぜ、善い事には却って手落のあ
るもんだが、この節の悪い事は如才なく萬事に行届いて、うまい仕掛に出来てるよ」
「仕掛といへば今、僕の居るところは面白いぜ、大さうな看板を懸けた易者だからね」
「易者、八卦見か、そりや振ッてる」

「ところが大道で算木筮竹を捻くる八卦よい屋の部でない、なか／＼大仕掛けた、まづ玄
關に控へた四五人の弟子は羽織袴さ、先生といふのは今年五十一か二で、まだ胡麻鹽の
管だが、どうして染めたか雪のやうな眞ッ白な髻を胸の邊りまでコキ下してね、その服
装は行者でもなく神官でもなく裁判官と辯護士と俳諧と茶の宗匠を掲ぎ交ぜたやうな一
種異様の風で、客に對する時は暫時の間、瞑目冷坐、殆ど木像の如くなるが、萬事こ
の勿體ぶつた大業なところで、大抵な奴は、やられるらしい、おまけに火鉢とか座蒲團

とか客に出す道具一切が、なか／＼奢ッてる上に必ず茶と菓子を出す、それも盆の上に
載せたまま突き出すやうな錢の取れない遣り方と違ッて、お化粧をした十六七の小間
使が摺り足の天目といふ工合だからね、たまらないよ、催促するに及ばず客の方から狼
狽へて、うツかり高い見料を置いてくる調子に出来てるのさ」

「しかし易は中るのかい」

「中るもンか、小さな書物屋ほど本箱を列べて、いかにも仔細らしく構へてるが、なアに
縁日の賣卜者と同じこツた、つまり白癡威嚇の道具立が立派だから、亡者ども面くらッ
て来るのさ、大體この易者といふもの、誰にでも出来るさうだぜ、學問も絲瓜もあツた
もンぢやアない、もし身の上の吉凶判断なら、来る奴の半分を吉として半分を凶とすれ
ば、黒か白か、どツちか中るに極ッてるよ、そこで中ツた奴は不思議さうに驚いて二度

も二度も来るし、また世間へ吹聴もするし、中らない奴は其まゝ来ないでも、せんぐり新亡者が詰め掛けるから、いつでも客の絶え間なしといふ理窟だ、世の中は廣いよ、亡者といへば、どうせ迷ッて来る奴で、第一、かつぎ屋ばかりだからね、駿河臺下の猿樂町をアタリが臺下のエテ樂町と言ツたり、硯箱がアタリ箱で鯛がアタリメ梨がアリノミかういふ連中を相手にするんだもの、理由はなによ、汝の裏庭に大きな松の樹があるだらう、何、ないか、なくて僥倖、もしあれば大變だ、家内中の生命に拘る、といふやうな工合さね」

「うまいね」

「うまい善さ、年中この術を天井裏から聞き飽いてるんだもの、まだ呵しい事がある、この易者先生、未然を察すること明鏡の如しといふのが口癖でね、世間の亡者も十人に六

七人は實際、さう思ッてるんだ、ところが先月の末、盜賊が這入ッて、ランと取られたまるで一棹の算笥を空にしられたが、二年も三年も先の未然を察する先生さらに其夜の事を御存じない、おまけに夜が明けても知らないで、やはり亡者の前に一日、傲慢な面をしながら頻りに未然を察して居たが、やうく二日目の朝、何か出さうと思ッて気が付いた、気が付くと俄に慌て、警察へ届けるやら知合の刑事を呼んで頼むやら、上を下への大騒ぎよ、なアに宵から盜賊が二人も縁の下に忍んで居て其曉方に大きな風呂敷包みを背負ひ出した事まで、この乃公の方が御存じだ、ちよいと天井裏で音をさしてもしッしツと喧しく吐すくせに、がたく枕頭の算笥を空にしられて、二日目まで知らないといふ、まぬけた未然の察しやうがあるもんか、もし鄰屋から火事でも出りやア、きツと寢惚けて、焼死する先生だよ」

「八卦見、うぬが身の上しらすといふが、今、僕の居る家も身の上しらすの夫婦だぜ、良人は四五年も米國で學問の仕揚げをして來たといふ男、どツか海外に關係のある大きい會社の外交掛りだが、細君また日本で最高の女學校を出た女さ、つまり雙方から相愛し合うて理想の家庭を作つた筈だが、さて作つて見ると雙方から不足だらけだ、細君の方ぢや、折角、骨を折つて拵へた洋食が何故お氣に入リませんとはいへば、良人の方ぢやア意地になつて、そんな下手な來來損ひの洋食が口へ遣入るもんか、第一また人の妻となつた以上は一家の經濟を考へろ、わざ／＼餘計な金と手間とを使つて料理法の稽古なにか仕なくつても宜からう、おや、稽古では御坐いませんよ、なアに稽古さ、限りある收入で無闇に洋食の稽古しられて堪るもんか、寧ろ立派なコツクを、高い給料で抱へた方が増だよ、では良人お抱へなさい、さア今すぐ高い給料で抱へて下さい、なんだ此女、

いやしくも良人に向つて、いゝえ向ひは致しません、いや向つて來た、今の調子は遺憾なく良人を馬鹿にする表情だ、全體、汝の顔は近ごろ妙に圓滿を缺いて來たぜ、わたしの顔より良人が家庭の圓滿を無理に缺かして來たのでせう、と萬事かういふ工合で、いち／＼衝突が始るんだ、實は笑つて済むやうな、つまらない事を負けず劣らず文句澤山の理窟詰でいや侮辱したの、しないのと、他人でもないに、何故あゝだらう、現に前夜も一旦、寢靜まつたと思つたが、むく／＼と急に兩方から起き直つて曉方まで、のべつに喧しい議論だ、考へて見ると、あれほど達者に理窟ツぽい夫婦だから嫌なら嫌で、すぐに別れる筈だが、借また悪くないところもあるんだね、つまり兩方の人間と人間に喧嘩する氣も何もないが、兩方の學問と學問が邪魔になつて鉢合はせをするんだぜ、その證據に兩方から理窟のない時は至極お目出たい夫婦だ、あまり目出た過ぎて實際、聞い

ても見ても居れないほど、べたくする事があるよ、をりく西洋風に抱き合つて晝日中、キツスを遣り出すかと思へば、すぐまた、それが原因で喧嘩だ、今の良人には暖味がなかつたとか、いや汝に眞心が満ちて居らなかつたとか、可哀想に毎日かういふ事を見せられるから、いくら来ても来ても一月と辛抱の出来た下女がない、實は乃公なんか外へ遁げ出さうかと思つてるくらゐだ」

「ところが乃公の方は、また反對に大變な蠻カラだよ、壯士の親方で、雷の部屋ぢやないが、ごろく、年中ごろついている奴が七人も八人も居てね、一時は随分、うまい仕事もあつたやうだが、近來は急に大饑饉だ、まづ第一に米屋が止まる酒屋は無論の事、味噌醬油も炭薪も、ばつたり通ひ路が絶えて仕舞つた苦しまぎれに、近處の辨當屋を喝して、三度三度無理往生に入れさしてゐるくらゐなもの、おかげで乃公なんかも酷い目に逢

つてるよ、いくら不味くつても飯粒一個、餘す奴等ぢやアなしさ、辨當函の空は舐めて取つたやうだ、あまり忌々しいから、自暴に荒れてやると、吐す事が怖ろしい、食ふものがないと思つて鼠まで馬鹿にしゃアがる、どうだ五六疋、とツ捉へて鹽焼にでも仕てやらうか、案外、美味いといふこつたぜ、や、これを聞いて思はず震ひ上つたよ、冗談ぢやアない、うか／＼すると實際、やりかねない奴等だ、モウ乃公は今日から歸らない決心だ、どツか宜い家はなからうかね」

「ある／＼、あるぜ、そんな恐ろしいところに居すとも、僕の家へ來給へ、もし人間に鹽焼の味でも覚えられちやア大變だ、仲間一統に關はるよ、僕の方か、僕の方こそ、全く氣樂だぜ、藝術家だからね」

「藝術家とは全體、何だい」

罵倒録—鼠の會合

「何だか知らないが藝術家だよ、いくら本人のいふ事は當にならなくツても、あれほど喧しく毎日毎日、あけても暮れても頻りに藝術藝術と騒いでるから藝術家に違ひない、あまり藝術家の上の部でないにしろ、まさか外のものンぢやアなからう」

「しかし職業は何をしてる」

「さア、その職業が藝術家さ、兎も角これといふ店も出さず、看板もなく、さりとして金もないやうで、たゞ遊んでる職業だね、ぞろ／＼絶えず朝から晩まで妙な人間ばかり出遣入りするから、猶更ら職業が分らない、また来る奴も来る奴も不思議に一人として、これが今日の用事といふ用事がないらしい、げらげら笑ツたり、こそ／＼私語いたり、稀には怒る事もあるがね、つまり最初から最終まで冗談と無駄ツ談話で、おまけに來たが最後、根が生えて仕舞ツて歸る事を知らない尻の長い奴ばかりさ、よく／＼閑人の寄合

だね」

「それぢやア金がないにしても、ないで濟まないね、いくら氣まぐれな閑人だツて、食ふものも食はずに冗談は言ツて居れま」

「そこだ、そこが面白いんだ、貧乏のくせに食物の談話となれば、昔の大名も及ばないやうな贅澤な事ばかり吐してね、無論、いふだけだ、乃公は去年の暮から住み込でるがたゞの一度も談話に出た食物の匂ひを嗅いだ事がない、着物も同じ理窟で年中、べらべらしたものを纏ツてるが、實は嫌に通がツてるばかりで、これといふ金の掛ツた念の這入ツた底光りのする濼い風は迎ま無効だ、まづ例を擧げて見ると、十八金と見せた時計も天ぶらで、本場と見せた大島も紡績で、米澤仕入の半琉球が關の山と來てるから、外の事は一切いはずとも分るだらう、木綿なら木綿で立派に通るものを、何故あゝ苦し

ツて世間の流行を追ツかけるンだらう、をりくいふ事を聞くと何だか難しい文句を列べて、世の中を自分が一人で掻き廻してやるやうな勢ひだがね、借お手許は右の通りだ、しかし毎月晦日の諸拂ひに、米屋でも薪屋でも、その帳面へ、右の通りと満足に書かした事はなからう」

「ところで主人といふのは幾歳ぐらゐだ、細君は」

「さうさね、先刻の易者と同じで、やはり先生といふンだぜ、その先生が今年三十七八、奥さん奥さんといはれるのが二十三、四、五、六、事によると七八にもなるだらうか、似たもの夫婦で萬事が先生の御風姿に負けない仕立さ、加之も十四五の小娘が著るやうな荒い綺でね、でこく髭に白粉ベツたりの眞ッ白だから、美のか醜いのか、さツぱり遠見ぢやア知れない、それに不心得千萬な奴だね、この先生になりたいといふ藝術の卵

子が二個、書生のこツたよ、下女が一人、以上五人家内だ」

「だが、さう遊んでるやうな職業で、すきな熱を吐きながらよく暮して行けるね」

「よくは暮して行けないさ、根が臆病で居ながら、むやみに威張りたのが疾病で、いふ事は大層だが、する事は何にも出来ず、いやしい金銭なンか、どうでも宜いと高く止つて實は先生なかく、どうでも宜くないンだよ、わづかの目腐れ金に困つて、狂氣の頭を蜂が螫したやうに走り歩くな、繻縷でも掻き集めて質草の種に盡きない間は、まだ天下泰平の部で、いよく槍の先へ栗を引ツかけて四方八方へ振り廻す段となれば、目も當てられない、しかし方便なンで、お玉杓子を庭の泉水へ入れて喜ぶ茶人もある世の中だから、この先生だツて、まさか見殺しにする人間もないらしい、さんざ青息吐息の後で、もう今度こそ、まゐるだらうと思へば、借また妙なもんで、どツからか救ひ人

が出て来て生命を繋ぐから、生涯 あゝだ、實は却つて先生のためにならないところを、こゝが即ち藝術家だといふ調子で、本人ますく大澄ましの體、逆も濟度の道はないよ、おまけに細君、大の嫉妬家と來てるから、その中で胸倉騒動が起るね、また先生も先生だ、どこへ往つても、どうせ持てる筈はないに、ちよいと手許が樂になると、こそく妙な穴に這入り込むので、月末の御難場ばかり引き受けてる細君、黙つて居ないさ、加之も先生は肺の氣があつて、ひよろく青白く瘦せたところへ、細君は思ひ切つた肉體美の衛生的婦人、たまらないね、藝術家、ぎゆうくいはされて何の藝も出ない、すると二人の書生が飛び込んで、此奴また止せば宜いに、先生の肩を持つて、そりやア奥さんいけません、そもく藝術家といふものは、あらゆる方面の實地を研究すべきが天職で、強ち先生が自分の色慾上に耽溺せらるゝ次第でもありません、なんカンと吐すから、

ますく騒ぎが大きくなつて、始末に終へない

「しかし其まゝ始末に終へないぎりぢやア治まるまい、どうなる、後は」

「その後が呵しい、さんざ騒いだ果に、夫婦師弟の仲直りが蕎麥の盛でも二杯づゝ食つてすぐに治まるね、どうだい、かういふ面白くつて、氣樂な家はなからう、來るなら僕の方に限るよ、いくら貧乏して居ても萬事、だらしのない世帯だから、案外、乃公なんかの食ふものはあるぜ、すべてに行届いて嚴重な此ごろの金持より却つて暢氣で樂だよ」

「なるほど、さういへば全く、さうだ、こりや、藝術家に限るね、だらしのない世帯が我々に取つて何よりも第一の居場處だ、イツそ皆で當分、おし掛けようかね」

「來給へ、來給へ、もし變に氣が付いて臺所の戸締りなんか生意氣に世間並の事をすればかまはない、腹癒せに着物の襟でも袂でも嚙つて、ラんと質の値を下げてやらうぢやな